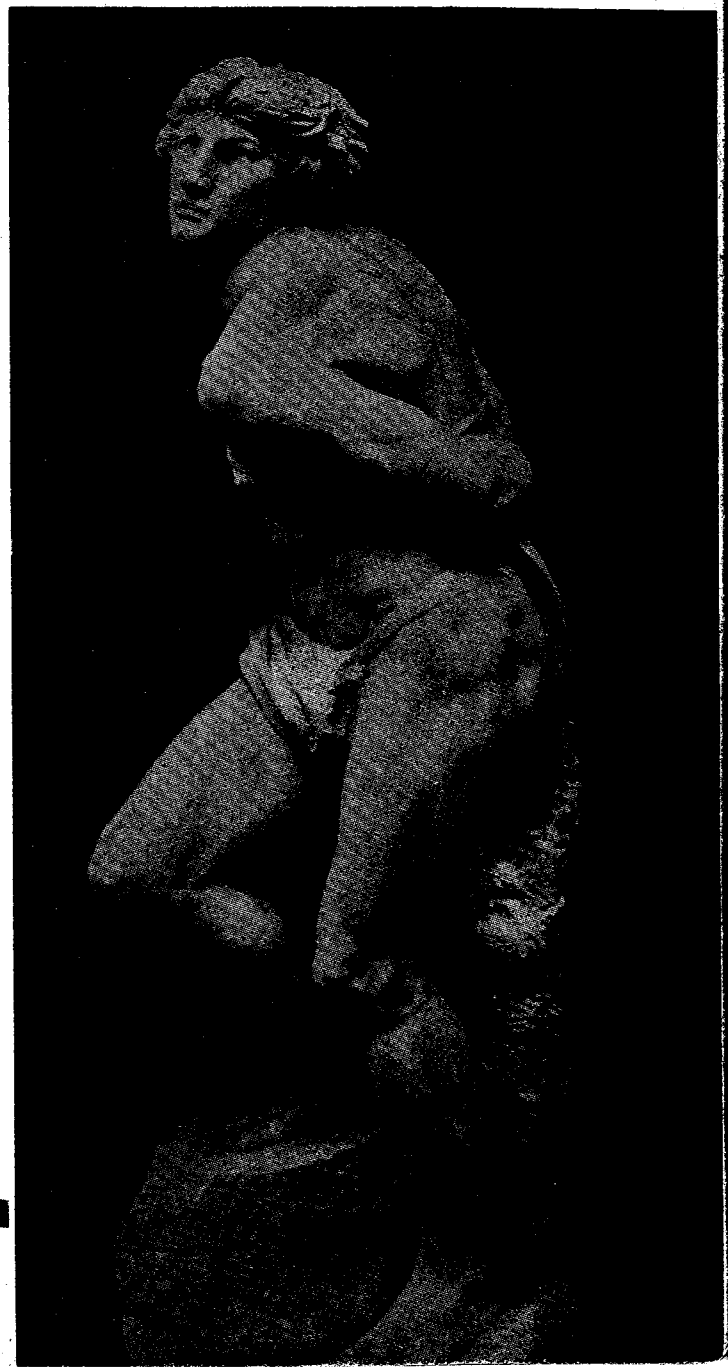
以前



1950

寄贈　第2期卒第2代同窓会長

友岡正孝

以前

——1950年號——

とほき國よりはるばると
ネカーの河のなつかしき
岸に來ませるわが君に
今ぞさゝげんこの春の
いと美はしき花飾り
いざや入りませわが家に
さはれ去ります日もあらば
しのびたまはれわかき日の
ハイデルベルクの學びやの
さちおほき日の思ひ出を

——〃アルト・ハイデルベルク〃より

☆編集後記

以前

目次

社會科學への道……寺尾琢磨（一四）

科學と人生……牧野融（一八）

現代社會とキリスト教精神……國枝夏夫（一五）

宗教の使命……安田勝（一六）

貝塚の研究——神奈川縣下組東貝塚の調査を中心として——……池上明哉（一八）

學生ジャーナリズム小論……新聞研究會（乾洋夫、尾山明、羽根田整）（一三）

民間放送開始の受信機に與える影響……田中寛（一六）

〝きけわだつみのこえ〟に應える

生き殘つた人々は沈默を守るべきか……今宮雅敏（四二）

一學生としての反省……淺利慶太（四五）

或る女友達への手紙——グルツクのオルフオイスに關連して——……林光（一四）

短歌★黃道歸還——轉載——……田中隆尚（四〇）

アーダルベルト・シュティフター……黑田壽郎（三〇）

ラフカディオ・ハーンのこと……今橋朗（三七）

ニイチェ研究序章——生と道德——……茅野良男（六三）

ロマン・ロラン「內面の旅路」……安東伸介（五〇）

ロマン・ロラン「戰を超えて」……印東二郎（四八）

【創作】晩夏……關恒久（六八）

絲瓜の日……森直也（七三）

☆編集後記

社會科學への道

寺尾琢磨

「社會科學への道」とは恐ろしく大きな題を與へられたものだ。蘭語を全く知らぬ杉田玄白一味は始めて蘭書を手に入れ、さてその「書に打ち向ひしに、誠にカジなき船の大海に乘り出だせしが如く、茫洋として寄るべなく、只あきれにあきれぬたる迄なり」(杉田玄白、蘭學事始)。私もいざ書かうと「原稿紙に向ひしに、」あとは前文を寫せばよい。とは言つてもあきれてゐるだけが能でもないから、思ひついたまゝにいくつかの要點を記して見よう。少しもまとまつてはゐないから、そのおつもりで。

題の主旨は社會科學を學ぶにはどんな心構へが必要かといふことであらう。この場合先づはつきりさせておかねばならない問題は、一體社會科學とはどういふ性質の學問であるかである。東京へゆく道をきかれたなら簡單に答へられるが、例へば有名人になる道をおしへろといはれると當惑する。どういう意味の有名人になりたいのか、政治家としてなのか、學者としてなのか、スポーツマンとしてなのか、或ひは泥棒としてなのか、その點がはつきりしなければ、道をいふことなど思ひもよらない。そこで第一に社會科學の性格を一應ふり返つて見なければならない。實のところ、こうした問題で、目標の性格さへはつきりすれば、それに至る道は自ら開けるともいへるのである。

學問を大別すれば形式科學と經驗科學との二つになる。前者は數學や論理學などの總稱で、正しい考へ方、むづかしい言葉でいへば思惟の列序を考究する學問である。それは超經驗的な、從つて時代や場所に關係のない普遍妥當性を追求する。數學の命題を考へて御覽なさい。こうした學問によつて私達は合理的な考へ方を學ぶのであつて、このことから形式科學は方法學といつてもよい。數學が自然科學にだけ必要だといつた考へは飛んでもない間違ひで、これはいかなる學問にも必要なのである。このことは後でまた述べよう。次に經驗科學とは天文學、物理學、醫學のような自然科學と、政治學、經濟學法律學、文學等々の所謂社會科學との二つから成る。經驗科學とは經驗的現實、卽ち大雜把にいへば自然に在るもの、起るもの、人の作つたもの、行ふもの、新らしい言葉を使へば實存するもの、これを對象とする學問のことである。この點では自然科學も社會科學も何等異るところはないが、では差別はどこに在るかといへば、自然科學の對象たる經驗的現實は人間の意思と無關係なもの、社會科學のそれは人間の意思から作られたもの、といへるであらう。ここに私達は自然科學と社會科學との基本的相違を見るのであつて、社會科學への道はこれから導くことができる。

元來社會とは私達人間の集團である。私達は私達の生活をより豐かにするために互ひに協力し、反撥し、制度をつくり、こわし、不斷の努力をつゞけてゐる。それらの結果が社會現象となつて現はれるのだが、それは自然現象とちがつて、自分と連結した價値判斷、つまり利害關係の判斷の集積に外ならないのである。人が敢へて自分に不利になる行爲をなし制度を設けることはあり得ないからである。ところが人々は自分の置かれた特定の地位に執着、自分の立場から發言するから、一つの事柄についても種々樣々の意見が現はれる。そのどれが正しいか、そこには一般的標準は容易に求め得ないのであつて、例へば共產主義がよいかどうか、これに自然科學に於けるような客觀的斷定を下すことはできない。要するに社會科學は私達自身が含まれてゐるところの社會を對象とし、それを私達自身が客觀的に眺めねばならぬといふところに、最も大きな困難があるのである。學問たる以上は、この客觀的立場はもちろん最大要件であるから、從つて社會科學を志す人は、第一に自分の特殊的偏好或ひはイデオロギーを努めて抑止せねばならぬ。社會は自分の外延だと判れば、社會研究は謂はゞ自

己の研究であり、從つて自己批判が社會科學の精神なることがお判りになるだらう。

右と關連して私達は社會科學のもつ歴史的性格を忘れてはならぬ。自然現象とちがつて社會現象は時代により國によつて著しく相違する。對象がかように變化する以上、社會科學は歴史科學である。このことから、右に述べた個人的偏好と相俟つて、この學問には自然科學のもつ普遍妥當性はないといふことになる。あるとき正しいと認められたことも次の時代にはそうでなくなることは、殊に最近のような激動期に甚だしい。軍國主義、經濟統制、家族制度等々を考へて御覽なさい。併しそれらが永久に葬られると見るのは早計で、次の時代には再び華々しく登場するかも知れない。併しかような激動の中に必ず正しい流れはあるのであつて、歴史性だけに捉へられてゐたのでは、これを見出すこと困難である。私達に必要なことは一方では正しい方向への變化には自らを順應させ、他方ではその反對の方向への變化に對しては敢へて抗爭する勇氣をもつことである。何が正しく何が正しくないか、これを訓へるのが社會科學の任務であつて、多くの知識を養へば、無闇に混亂の渦に卷込まれることもなく、また本流からとり殘される心配もないであらう。個人は社會に束縛されるが、個人が社會を動かすことも事實である。社會を指導しよりよき生活へ案内することができれば、社會科學を學んだ甲斐は遺憾なく發揮されるわけである。もちろんそれは多くを學んだ人に期待できることで、生半可な初心者にやられてはたまらない。平和の會と稱する得體の知れぬ會のあの氣ちがいぢみた連中の眞似は禁物である。

第三に、社會科學は入り易いが進みにくい學問だといふことを忘れないで欲しい。入り易いといふ意味は、私達日常の生活が取扱はれてゐるため、初歩的なことは誰でも知つてゐるといふことである。例へば經濟學の對象たる經濟生活とは賣つたり買つたり働いたりしてゐる私達の毎日の生活に外ならない。日頃經驗してゐることなら判り易いわけで、事實誰でも無意識のうちに經濟學を勉强し經濟學を論じてゐるといへる。この點では初歩から勉强しないと何にも判らない天文學や物理學とはまるで違ふ。併し一旦本格的に社會科學にとりかゝると、途方にくれて了ふ。茫漠としてとりとめがないからである。社會ほど複雜な機構をもつたものはない。それは文字通り無數の要素の產物である。例へば日本といふ社會は、單に人

間だけでなく、國土、地形、風土、等々から構成されてゐる。社會は單に人と人との關係だけでなく、人と物との關係でもある。それらの交錯から生れる社會現象は、エタイの知れないカクテルのようなもので、よほど鋭利な分析力がない限り、本體をつかむことはできない。物價が上つたとする。供給が減つたためか、需要がふえたためか、或ひは通貨が增發されたためか、それをはつきりさせることは容易でない。殊に社會科學の困難さは理論の當否を實驗によつてためすことができない點にある。物理の實驗では他の條件を一定にし、一つの要素だけを變化させることによつて、その要素の作用がはつきり判る。例へば壓力を一定にして溫度だけ變化させれば、溫度がいかに物體を膨張させるかが確定されるであらう。同じようなことを社會について試みることはできない。社會を實驗台と化すわけにはゆかないから。どういふ制度がよいか、どういふ思想がわるいか、これらは實際の結果から判斷する外はないが、その場合には他の條件がちがつてくるから、正しい判斷は下しにくい。アメリカと日本を比較して民主制と天皇制とどちらがよいかを簡單にいふことは出來ない。他の事情がちがふから。こんなことが社會科學に雜多な理論を生む大きな原因となつてゐるのである。

社會科學の複雜性をのり越えるには、結局は豐富な基礎知識と正しい研究方法を以てする外はない。社會には物的基礎があるから、社會科學を學ぶためには自然科學の知識も多分にもつてゐる必要がある。經濟學の中に、太陽や金星が經濟活動の消長卽ち景氣變動を左右するといふ說がある。その眞僞はまだ確定されないが、自然に圍まれてゐる人間生活に自然の變化が何らかの影響を與へることは確かである。そうなれば、經濟學は自然科學と切り離しては不可能だといふことになるのであつて、このことは他の社會科學に於ても同樣である。おれは經濟學部へゆくのだから物理や化學はどうでもいゝと考へる人があつたら、大きな問違ひである。高校や大學教養學部の科目は、自然科學にゆく人にとつては文字通り教養のため、卽ち円滿な人格をつくるためといへようが、社會科學といふ間口の廣い學問に入る人にとつては同時に專門への基礎科目でもある。社會科學への道といふ難問も、現に高校に學ぶ諸君に對しては、凡ゆる科目に興味をもてといふ平凡な答で結ばねばならぬ。（筆者は本校校長・慶應義塾大學經濟學部教授・經濟學博士）

科學と人生

牧野　融

1

かつてダーウインの進化論に對する批判が日本のある學者によつて行はれたとき、それ見ろ、といつた宗教家があつた。その學者の批判といふのは、ダーウインが指摘した生物が進化するといふこと自體を批判したものではなく、生物進化の過程あるひはその原因などについてダーウインの與へた説明に對する、もはや古めかしくさへなつてゐる反駁の一つに過ぎなかつたのであるが、この宗教家は、どうやらそれが生物進化といふ事實そのものまで否定してゐると思ひ違へたのであらう。「人間が猿から進化したといふダーウイン等の説はこの學者のために論破されたではないか、人間は古來から人間以外の何者でもなく、地球がいまだ灼熱の鐵塊であつた當初、肉體の存在が考へられない頃には、地球上に靈氣として存在したのである。」と述べて、人間の靈性を強調してゐる。進化論をめぐるハツクスレイとウエルバフオルス僧正との論爭を想起させる話であるが、この宗教家の説いてゐることを暫らく考へて見ることにしよう。

雞の卵からは必ず雞のひながかへる、といふ生物學上でも明らかに知られてゐる事實を引いて、彼は人間は必ず人間から生まれるのであつて猿のやうな下等な獸類から人間が生まれて來る筈はないではないか、と切り出してゐるのであるが、此所に吾々がよく考へて見なければならない二つの問題がある。

第一の問題は、雞からは雞が生まれ、猿からは猿が生まれる、といふことは、地球の歴史から見ればほんの一瞬間のできごとの觀察の結果で、しかも雞や猿から生まれた子が親と寸分違はないどころか、時にはかなり違つ

質を備へてゐるやうなことさへある、といふ二つのた形事實を見逃してゐることである。

地球の歴史は大體三十億年前後[註1]と見積られてゐるが、これを一年に壓縮してみると、吾々人間の一生は30秒位の間になつてしまふ。假に有史以後の人類の歴史を三千年と見ても、それは地球の一年の十二月三十一日の午後十一時三十分頃から始まつた、ほんの半時間あまりの間に起つたできごとに過ぎないのである。もつとも、聖書に依れば、地球誕生以來三日目から六日目までの僅か四日間に人類をも含めた總ての動植物が創造されたことになつてゐる。しかし、さすがに四日間では心細くなつたのか、或るアメリカの護教家は聖書に述べられた創世の一日は今日の時間にしてそれぞれ七千年になると主張した。だが、三千五百年間に相當する晝と夜を當時の生物はどのやうに過したことであらう……

地球の自轉に關する學者達の計算をまつ迄もなく、吾吾には何としても理解のできない説明である。

所で、吾々は生物學上、Homo sapiens といふ種に屬してゐて、この種に屬する人間は後期舊石器時代から地球上に姿を現はしてゐるのであるが、初期の Homo sapiens と今日のそれとはかなり外見が異つてゐる。初期のそれに屬するクロマニヨン（Cro-magnon）人は、背は高く頭の巾は甚だ廣く鼻は高く驚くべき大きな腦を持つた人間である。このやうに新石器時代の一寸前の人間でさへ今日の人間と相當外見・特徴が異るのであるから、更に過去にさかのぼれば今日の人間とは似もつかぬやうな人間がこの地球上に棲息してゐたものと推測される。實際、第四紀の始め（約六十萬年前）頃から地球上に姿を現はした直立猿人[註2]の如きは、少くとも吾々人類の祖先の仲間と考へざるを得ないのであるが、しかし人類（オランウータン）猿（ゴリラ）とも非常によく似てゐるのである。

このやうに、長い時間の經過の間には、吾々の短い一生、短い歴史の間に觀察することがらと矛盾するやうに見えるできごとが起るのである。

勿論、だからといつて地質時代に起つた地質現象は全て吾々の常識とは桁違ひの昔に起つたものだ、とばかり

はいひ切れない。例へば小規模の海岸段丘の中にはその生成が有史以後の、即ちその記錄が古文書に殘されてゐるやうな地震によると考へられるものが少なからず知られてゐるのである。

扨て、先に述べた二つの問題の後者は何かといふと、この宗教家が一面では以上のやうな非科學的な考へ方をしてゐながら、その半面で所謂科學上の知識を巧妙に利用してゐる點である。即ち、地球がかつて非常に高溫であつた時代があるとか、そのやうな狀態にあつた地球の上には肉體を持つた生物は存在し得る筈がない、といふようなことを述べてゐるのであるが、これはかのラクタンチウスが地球々形說に反對して對蹠面の存在を否定するために述べたといはれる有名な言葉＝おのれの足が頭よりも上にあるやうな人間の棲息するといふことを—また雨や雪や霰が大地に向つて上向きに降つて來るといふことを—そんなことを信ずるやうな馬鹿者があるであらうか＝とある意味で深い連がりを持つたいひ方なのである。つまり自分のいひ分にとつて都合の好い知識—特に科學者の說いた—は、それが多くの場合やがて修正さるべき運命にあるといふことを少しも考へることなしに無條件に認めてしまふ—さういふ共通した誤りを犯していつてゐるのである。ガリレイのピサの斜塔に於ける實驗が行はれるまで、いやさらにその後約半世紀を經てニュートンによつて萬有引力の理論が確立されるまで、恐らく殆ど全ての人々が重い物體は輕い物體より速く落下すると述べたアリストテレスの言葉を疑つたことがなかつたであらう。また、アインシュタインが彼の相對性理論によつて光も亦大質量の物體の近くではその進路を曲げられることを予言し、且つその予言が觀測によつて確められるまで、誰が光の直進說を疑つたであらう。殆ど誰もが疑はない眞理でさへ、一人の叛逆者・一人の天才の手によつて絕對の眞理ではなかつたことが明らかにされる場合があり得るのである。即ち、吾々は科學上の知識を利用するに當つて、それ相應の根據を持つことなしに妄りに取捨することは許されないのである。

唯このやうに考へて來ると、吾々がとかく無條件に依

存し易くなつて來てゐる科學なるものが、ずい分頼りなくあやふやなものに見えて來るかも知れない。然も、一方では原子爆彈・水素爆彈などといふ怖るべき科學の鬼子が地上に生まれて來てゐる。だが、こんな所に科學といふものゝ神秘性が考へられ、科學者を眞理探究へかり立てる何ものかゞひそんでゐるのではあるまいか……。

註 (1) 地球は今から何年前に誕生したか？ この問題は放射性元素の研究・地層の研究によつて解かれる。即ち、岩石中に含まれる天然放射性元素の崩壞現象（その反應速度は普通の外圓條件の變化によつて、影響を受けない）を利用してその岩石の生成後の年令を知るのである。このやうにして決定された地球上で最も古い岩石は、マニトバ產ペグマタイト（先カンブリア紀）の二十一億年で、これから地球の年令が約三十億年といふ値を推測してゐる。

註 (2) 一八九〇年オランダの軍醫ドヴオア（E. Dubois）によつてジャヴア島トリニールの第四紀層から發掘された Pithecanthropus erectus のこと。形態的にいつて、現代の最高猿類を超越して人類的性質の現はれ始めたものであるが、系統發生的にいふと、今日の人類の嚴密な意味に於ける直系祖先と見做し得べきか否かなほ疑問を殘してゐる。

2

唯物論者にいはせると、自然科學は人間生活のために自然を利用し支配し又變革するための必要から生まれ、それを基礎として發展してゐる、自然を利用し支配するためには、自然についての樣々な知識を求め自然の中に行はれてゐる法則を知ることが必要なのであつて、こゝに自然についての科學即ち自然科學が生まれ發展する根據がある、といふことになる。そして、自然科學は人間が自然を知らうとする知識・欲求によつて生まれ發展して來たものであるといふ說明は誤りであつて、所謂象牙の塔の中に閉ぢこもつてゐる科學至上主義者の獨りよがりな考へ方でさへ、無意識のうちに實踐的方面と關係を持ちそれから影響を受け又それに影響を與へてゐる、といふのである。

科學の起源を論ずる場合には、勿論この考へ方が正しいものと思はれる。然し、或る段階以後の科學の發展の跡をふり返つてみると、必ずしもさうとばかりはいへないやうな氣がする。衣服は、なる程寒さをしのいだり身なりをとゝのへるために使用されるやうになつたもので

あらうが、若しその當初の目的のためばかりに使用されることになれば、無數の有能無能なデザイナーや仕立屋が失職の憂目を見ることになるであらう。あるひは、このやうないゝ加減なたとへ話を持つて來るまでもなく、秀れた業績を殘した內外の偉大な自然科學者たちの次にその二・三の例をかゞげるやうな言葉が、自然科學の發展の原動力はどんな所にひそんでゐるか、といふ問ひに答へてゐるやうである。

吾々が經驗し得るもつとも美しいものは、神秘なものである。それはあらゆる眞の藝術と科學との源泉である。

——アインシュタイン——

科學者は實益あるが故に自然を研究するのではない。自然に愉悅を感ずればこそ、これを研究し、自然が美しければこそこれに愉快を感ずる。

——ポアンカレー——

數百光年先の星の光を分析してそのなかに含まれる元素を知つて何になるか、原子の構造が陽電子陰電子中性子等から成立してゐることを知つてゐても何の役にも立たぬ、と考へる人人は已に科學の何たるかを論ずるに値ひしないのである。科學は單に自然現象の構成を明らかになすを以て足り、科學者はこれを行ふを以て天職と考へてゐる。……かくて科學者は自然と共に生き、その調和ある美しさを理性的に闡明しつくさんとしてゐる。即ち、得難き人生も是れに費して敢へて悔なく、以上の生活を至上のものと感じて生存してゐるのである。

——石本 已四雄[註3]——

唯物論者も、科學がその發展の途上に於て實際上の必要から遊離し獨自の線に沿ふて發達するかのやうに見えることはある、といひ、だがその場合にも何等かの仕方に於て實際的方面と關連を持つてゐるのであつて、科學と實際的方面との關連は一定してゐないと述べてゐる。此の言葉と、アインシュタインなどの言葉との間に浮び上つて來るのは、結局全體と個といふ問題なのであらう。今、此所でその問題に觸れることはさし控えるが、進化論或ひは相對性理論量子力學などの基盤が出來上つてゐても、その誕生にはやはりダーウイン・アインシュタイン・ボーアなどの產婆役の出現を俟たねばならなかつた所に、ひとつの解決への道が見出されるやうに思はれるのである。（筆者は本校地學科教官）

註 (3) 日本の生んだ著名な地震學者。地震は地下の岩漿の活動に因つて起るといふ學說を提唱した。

"學生ジャーナリズム小論"

新聞研究會編

第一章 學生新聞の概念

近代社會におけるジャーナリズムの發展と教育の規模の擴大は、學園社會に學生ジャーナリズムを臺頭せしめた。學生相互の親睦融和のために自治會が出來、學生の趣味機關として自然發生的に數々のクラブが形成されるように學生新聞の出現もまた必然的なものであつた。そうして、今や全國の高校大學の七割までが學生新聞をもつている。このような實狀から見ても學生新聞は學園內における言論發表機關として必要にして缺くべからざるものとなつている。內容においても學園ニュースの他に、學生教授の自由な評論、創作、クラブ活動による研究成果の發表——等が廣告面を除く全紙面を構成している。これは確かに一般商業紙と比しスケールこそ狹いが、自由な學生新聞の通俗的形態である。このことについて、GHQ民間情報教育局新聞課長インボデン中佐は「自由な學生新聞は學園におけるすべてのニュースを載せるべきで、〃太郎君がベースボールの試合で輝かしいホームランを打つたとか、花子さんが料理の時間に一番おいしいケーキを作つたということも充分なニュース價値をもつているものである……(中略)〃」と述べられている。

こうした性格を備える學生新聞は、一部の編集者のみで作成せられたものではなく、〃學生全員による學生全員の新聞〃として、すべての學生層に親しまれつゝ、彼等の胸中ですこやかに育てあげらるべきものである。——そうして、これが學生新聞を定義づけるものゝすべての要素に他ならない。

また學生新聞が健全に發展するための條件として、政治的色彩の無いことが必要である。政治的に片寄つた學生新聞が漸次讀者の減少を來たすということは、學生新聞編集者のすべてが心得ていることである。また學生新聞には、學生の手で編集し經營する〃（狹意の）學生新聞〃、學校の手で編集、經營する〃學校新聞〃の二種があるが、その二者の中間に位する樣なものも少くない。そうして全國における（廣意の）學生新聞の七割は、前者の形態をもつて發行されている。

さて、この學生新聞の起源は、東洋では我が慶應義塾の〃三田新聞（大正六年創刊）〃に發するのである。

〔乾 洋夫〕

第二章 學生新聞は何故必要か

我々の日常生活—大は人類の生活から小は學校や家庭のような集團生活まで、社會生活に必要な精神は「自治」である。あらゆる自由は知る權利から。（昨年度新聞週間日米共通標語）といわれるように自治社會を守り育てるためには報道言論の公正な機關が必要であることは今更いうまでもないことである。

集團社會の共通の目標や理想を廣く知らせ

て、その社會を明るく正しく運營していくのに新聞はかけ替えのない役割を果してくれるものである。

このような意味からも一般社會に新聞が必要であると同樣、學校生活の正しい、しかも樂しい運營には矢張り「學生新聞」が必要だということになる。

つまり、これからの學校生活に對する考え方は、より良き市民としての基礎的な教養を身につける所であるし學校生活が一つの縮圖された世界とか國家或いは社會として、學校生活を一つ一つ自分たちで運營して行かねばならない。學校は先生や經營者が運營して行くのであるが「學校生活」は學生の企畫や自治精神、協同の心で育てゝ行くものだということを、はつきり認識すれば、おのずから學生新聞の在り方についても解答が與えられるものである。從來、學生新聞そのものにも多少の誤解があつたようである。これは學校の經營する方にも無理解なことがあつたであろうし生徒側にも在り方についての認識不足があつたように思われる。

それは新聞という報道機關の持つ「力」が逆用されると不都合な結果を生じるものである。例えばある思想的背景をもつた人々がイデオロギーに律して新聞を編集して、やゝもすると學校當局の欠陥や不備を紙上で公開する。このため折角の建設的な意見も誤解されるし公に露わしたくないことも必要以上に擴大されて感情的な對立までいつてしまう。このようなために學生新聞といえば、すぐ何か戰鬪的な思想をもつたものだ、という先入觀を植えつけているため今でも學生新聞に對する理解が少いところもあるようだ。

これは學校側も生徒側も新聞に對する認識不足から來ることで、少くとも新聞の社會性を知つて客觀的な立場を是とする新聞常識が欠けていたためであつたと思う。

ところで學校新聞とは一體、何を目標にするのか、という點を考えてみると學生新聞はあくまで學校生活を題材とし學校生活を全校の生徒が共通に、享樂し學校生活を明るい自治體にするための機關になることである。

一言でいえば『學校生徒の自治の指針』が學生新聞だ、といえる。そこで學生新聞を作るにも又これを讀む場合にも大切な基準は、「學校生活にいかに織込まれているか」ということが價値を決定するものだということを念頭におかなければならない。〔羽根田整〕

第三章　學生新聞の自由と責任

學生新聞といえども公器である以上、それには當然一般新聞と同樣〃自由と責任〃がある。そうして今や、學生新聞においてもプレスコードは嚴守され、倫理規定まで重んじられるようになつたのである――このことは、學生新聞の社會的向上を意味するもので、甚だ喜ばしきことと云うべきである。また學生新聞は、その性質上その屬する學校の教育方針や校則に極端に反する記事を掲載することを自主的に差し控えるべきである。――このことは學生新聞の〃自由〃を保護する上に極めて重大なる意義を有する。

また一般新聞と變ることなく、政治的色彩の濃い新聞はその自由を奪われ、やがて自らを崩壞に導くものである。――かつての東大の〃大學新聞〃が赤色分子の侵入によつて讀者の信用を失い、やがて廢刊の止むなきに至つたのも實はこのためであつたのだ。政治的色彩を帶びた學生新聞は合法的に〃自由な學生新聞〃といゝ切ることは出來ないのだ。このことは既に一般商業新聞社における左翼分子の追放等から見ても容易に理論づけられるものである。

財政的な問題もしばゞ〃學生新聞の自由〃を迫害する恐るべき敵となる。政黨から資金の融通を受けたり、PTAの財政的援助を受けた爲に、その自由を奪われ、御用化された學生新聞の例がどんなに多いことだろう。學生新聞が連盟を結成し、相互扶助を行つているのも實は、これらの諸問題に對處するためである。〔乾　洋夫〕

第四章　學生新聞經營の行詰り

前章で學生新聞に對する樣々な批判が行なわれて來たので、此處では經營面について論じて見よう。現在學生新聞の經營はおよそ獨立經營によるものであるが、其の財政面に於ては三つの形體を持つと考えられる。

つまり研究上の財政面を學校から援助して貰う場合、云わば合資財政の場合、更にほとんど援助なしの獨立財政の場合等である。所でかような學生新聞と云うものが財政面でどのような形體を取れば良いかと云う問題については一樣に云えないが「學生新聞とは先生と父兄と生徒の連絡機關である」と云つた事には少くとも我々高校生には當嵌らぬ言葉であり、一切自分の手で編集し經營するのが學生新聞の本質であると考えられるのである。

なんとなればこの場合、獨立財政を撰ぶのが常套な事となるが、すべて理論と實際と合致する事なく現實の社會に於てこれが安定性を保てるのは國家財貨の流通が激しい時である。と云うのは獨立財政を取るからには、廣告を取らねばならないし、販賣もしなければならず、いくら意識して努力しても結局は形を變えた商業紙になりがちである。その上とかくインフレ狀態の時は、金の融通の樂な爲か廣告に於てもさほど苦はないのであるがこれがどうして長く續くわけがあろう。

社會の混亂の中にあつてインフレからデフレに移ると同時に急速に金の融通は詰つて來た。ここに於ても財政困難の兆しが表われ、そうして生產過剩になるに至つては遂に「資なき宣傳」と云う馨しからぬ段階に到達してしまつた。この樣な有樣で新聞による廣告宣傳も次第に思う樣にならずしたがつて當然宣傳効果のない學生新聞等には手を出さなくなつたのである。かようにして折角の獨立財政も深刻な世相にあつて、深刻な行きづまりを感じて來たのであり、學生新聞の一つの課題である廣告の撰擇性等は到底考えられない物と化したのである。そうして結果に於て獨立財政を取る事は學校と云う特殊階級の場合、社會狀態の比較的樂な時以外は如何に努力した所で無駄である事が今更はつきりわかつて來たのである。そうしてこの樣な破目になつた所は少くないであろう等と客觀的に考えて來ると廢刊になつても止むを得なくなるが、しかし要は如何にそれを處置するかにある樣で、他面から又學園新聞の必要を感じると財政面の安定性から御用新聞もよしと見られる向きもあるが、そうかと云つて獨立財政を續ける爲に或る企畫によつて赤字財政を補う事も、非常に失敗を招き安いのである。

小野秀雄氏は「新聞原論」に於て新聞が經濟的機構である事を述べているが、これがおよそ新聞と稱する物すべてに當嵌らないと解說されている如く、學生新聞がその本質に於て文化的活動か、或は經濟的活動かに關し、少くとも後者でない事は確かであり、更にこういう意味からもその財政事情に應じてその許す範圍で行動するのが、正しい行き方であると云う事は確信する事が出來るのである。そうして又過去に於いて行つた事がすべて未熟であつた事を自覺し、それらについて研究する事が、我々スクール・ジャーナリストの今後やるべき課題である。〔尾山　明〕

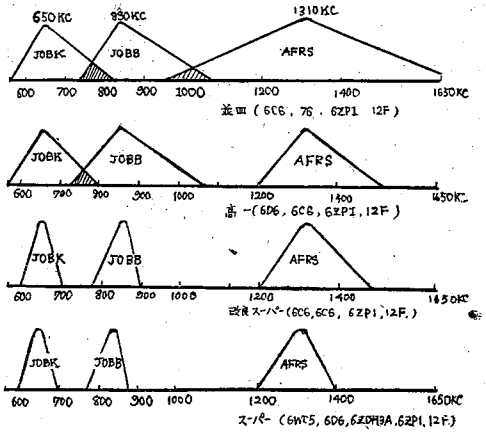
民間放送開始の受信機に與える影響

田中　寛

放送法並びに電波法の施行と共に電波が廣く、一般に開放されて以來、電波監理委員會に申請した民間放送局の數は現在全國で七十社に及んでいる。ところでこの民間放送が開始されたら、我々の受信機にどの様な影響を與えるだろうか。この點について考察してみよう。電波の性質から考え合わせて同じサービスエアリアを持ついくつかの放送局に周波數お割當てることわ、この取扱をよほど愼重に行わないと、混信とか聽取不能等の問題が起きてくるのである。特にわが國の様に狹い島國で人口密度の高い所で、その上全國に單一放送局がネットワークお持つている現在、これに性格の違ふ民間放送が行われると特にこの傾向が强い。現在日本で使用されている受信機の種類お調べると次の様になつている。即ちスーパー級の受信機が全體の七パーセントぐらい、他は高周波一段級が三九パーセントお占め、並四球あるいはそれ以上のものが五十パーセント、その他が七%である。

それでは各受信機について、その選擇性について調べてみよう。高周波一段級といわれる受信機の混信の實驗を行つたが、次の結果お得た。即ち同調周波からその同調周波數の大體一〇パーセント離調が必要である。この實驗より高周波一段級の受信機で混信お避けるためには、混信の恐れのある周波數は希望の周波數より、その十パーセント以上離さねばならぬということになり並四球で實驗するというまでもないが、これより更に悪く同調周波數の約二十パーセント以上離さないと混信お生じて來る。しかしスーパー級になると同調周波數より數パーセント離すことによつて充分なのである。第一圖は各種の受信機について分離試驗のデーターを圖示したものである。受信地は大阪中央放送局より十三キロメートル離れた所である。並四球級の受信機では、大阪第一放送・第二放送・AFRSの三つお完全に分離していないことに氣がつく。これでは民間放送により新しい電波が發射されても分離することが出來ないわけである。現在放送を完全に分離出來るのはスーパー級以上の受信機といふことになる。

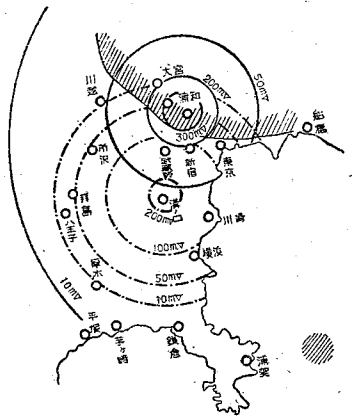
以上のデーターが示す如く放送バンドが五三五キロサイクルから一六〇五キロサイクルに擴大されても民間放送の電波が入る餘地の



あるものは四球スーパー以上である。

次に民間放送局設置の場所について考えて見る。せつかく受信機を改良してもやたらな場所に放送局お設置すると混信をおこす恐れがある。今ある都市の中心に放送局お設けたとする。とその放送局のごく近くの聽取者はその放送局の電波が强烈なため甚しい混信によつて、普通の放送用受信機では他の放送局のシグナルお傍受することが出來なくなつてしまう。この様な地域をブランクドエアリア（Blanked Area）と呼んでいる。この様な地域では放送局の出力・聽取者の受信機の種類（即ちその受信機の選擇特性の如何であるが）二つの放送局の距離・聽取者の分布狀態・混信許容限度・使用周波數の間かく等によつて異つて來る。特に受信機の選擇度特性は、この地域の決定に、きわめて影響する。もちろんこの地域が狹いことほど望ましいことであり又その區域内の聽取者の數が少ないほど、望ましいことわいうまでもない。そこで新に放送局を設ける場合、今後民間放送が開始されるから特にであるが）にはこの點に考慮して各局のサービスエアリアが耳に相交わらない様にすることが望ましいわけである。ブランクドエアリアは放送局の電力により定まるが大體次の様である。

放送局の電力	一三〇—一五〇W	一KW	五—一〇KW	二〇—五〇KW
ブランドエアリアの半徑	〇、四八—〇、八km	〇、九六—一、四km	二、四—四km	四、八—七、二km



例えば十Wの放送局では半徑四千メートルの圓内での聽取者は、放送を滿足にキャッチすることが出來ないわけである。そのために都市の眞中に放送局を作るのは望ましくないわけである。第二圖は東京附近電界强度を示したものである。實線で書いてあるのはNHKによる電界强度、點線で表わしてあるのは民間放送によるそれの予想圖である。

以上いろいろのべたが、民間放送はまず大都市から實現すると思われ、聽取者のスーパー化は必至である。スーパー化する事は非常に望ましいわけであるが、現在の社會狀態・經濟的負擔を考えてみるとまだまだ「日暮て道遠し」といつた感が深い。この問題を解けつするには何とかして今所有している受信機を生かしてこれから錯綜する放送をうまく分離して樂しむ方法があればということになる。それには三つの方法が考えられよう。即ち

一、現在のセットをうまく利用する方法。

二、現在のセットにスーパーヘテロダイン受信機の選擇度特性を與へるようなものを附加して使用する方法。

三、現在のセットをスーパーヘテロダインに改造する方法。

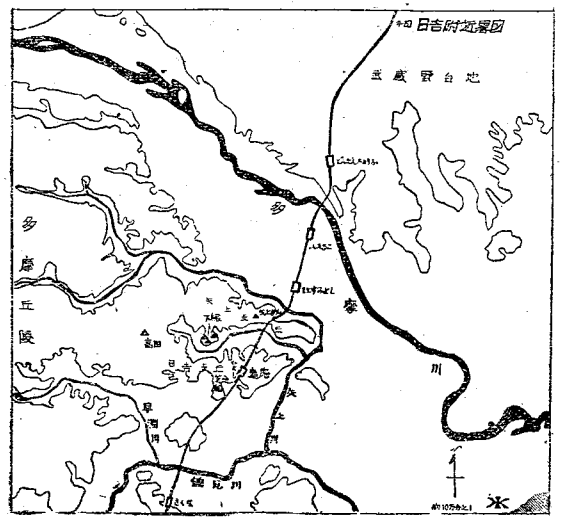
大體大別して以上の方法があげられる。

（數物研究會々員）

貝塚の研究

——神奈川縣下組東貝塚の研究を中心として——

池上明哉



一

貝塚は古代の住民がその食料の殘滓や不要器具を居住地附近に遺棄したものが長年月の間に堆積したもので、塵捨場とも云うべきものである。この貝塚が日本石器時代研究上、重要位置を占むるものであり、我國が世界有數の貝塚國であることは歴史の授業に於て既に御承知のことと思うが、その貝塚がいかなる狀態のものであり、いかにして研究されるかについてはあまり廣く知られてはいないので、こゝに貝塚の研究と云うことについて簡單に述べて見ようと思う。研究の實例としては最近、本校考古學會によつて發掘を行つた神奈川縣下組東貝塚の研究成果を用いた。遺物は整理されて本校にあるし、遺跡も一粁位の近さにあつて見學も容易であるから、本文を理解するには最上の例と思う。

二

貝塚へおもむく迄には種々の準備が必要である。まず目的の貝塚が決定したならば、地圖にその位置を記入し、又、その貝塚乃至は附近の遺跡に關する文獻に目を通して大體の概念を作つて置く。次で調査の日程、方法等を考えて、發掘參加者の係を決定し、調査用具を揃える。調査用具は充分準備して行かないと調査を不完全乃至は困難なものとすることは今度の調査でも痛感したところである。發掘具としては表土をはねる爲の

鍬、シャベル、貝層を掘る爲の馬鍬、竹篦、それに箕があれば調査坑に泥がたまるのを防ぐのに便利である。出土品を容れる布袋は多いほど良い。細かい遺物は小箱に容れるようにする。又、脆弱なものも出土するから綿が必要であり、遺物を置いておく爲、又、包む爲に新聞紙を用意する。調査具としては地圖(五萬乃至二萬五千分の一、日吉附近ならば東京西南部)方眼紙、ノート、カード、筆記用具、下敷が記錄に必要で、測量用具にクリノメーター、磁石、卷尺、折尺が要る。その他、寫眞機と三脚、貝塚の層を探る爲のボーリング棒と云う長さ一米位の鐵製の細い棒、遺物の泥落しに刷毛、それにナイフが必要である。

さて、これだけの準備を終へたならば、個人的な用意を整へて目的地に向うのである。

三

現場に於ける調査に就いて述べるに先立ちこれから述べる下組貝塚の占める位置に就いて記そう。關東地方は日本で最も貝塚の多い所で、殊に霞ヶ浦沿岸、荒川兩岸の奥東京灣地域、それに本貝塚のある多摩川沿岸はその群集地である。多摩川沿岸の地域では多摩川を挾んで東岸の武藏野台地(東京)西岸の多摩丘陵(川崎・横濱)に多數の石器時代遺跡が密集して居るので、私のノートにある數ヶ所の遺跡を次に記載する。

東岸(東京都)　　多摩川附近石器時代遺跡地名表　　池上明哉編

地名	遺跡	土器	貝塚鹹度	遺物	報告者	文献
太田區田園調布二丁目	貝	J・後	主鹹	動物土偶・土製紡錘車	江坂輝彌、田辰彌、久保大山柏、宮坂光次、甲野勇	考古学一〇・三
〃	貝	J・後				
〃	包	J・前				史前三・六
〃	〃					
〃 田園調布四丁目	貝	J・後	主鹹	折石斧	芹澤長介	古文一二・二
〃 雪ヶ谷町一二九〇	包	Y J・前		石槍・石鏃	大山柏、宮澤光次、甲野勇	史前三・六
〃 清明學院附近	堅穴	Y				考古学五・六
〃 馬込町東二丁目大東園植林地	包	J			齊藤武一	考評一・一
〃 馬込町東一丁目	貝				森本六爾	考雜二八・八
〃 馬込町東二丁目	堅穴	J・前			松岡六郎	〃
〃 調布千鳥町慈惠大附近	堅穴	Y		土製匂玉・青銅器	森本六爾、大山柏、宮坂光次、甲野勇	考評一・一
〃 久ヶ原町	貝					考古學五・一
〃						史前三・六

〃	上池上町	貝	J	土錘	河原經雄
〃	久ヶ原千鳥窪	貝	J・前	釣針	甲野勇、大山柏、宮坂光次、甲野勇
〃	雪ヶ谷町			主鹹	松下胤信
世田ヶ谷區玉川奥澤町三丁目八二〇		包	J		古文一二・五 古文一三・三 史前三・六 史前二・五

西岸平野地區（神奈川縣川崎市）

上長澤稗原境		包	J・前		古文一二・二
高津久本		包	Y・J・前	淡鹹	史前三・六
末長窪台		包	J・前		考古學五・六 古文一二・八
生田長澤中ノ谷		包	J・前		〃
生田長澤神山明		包	Y・J・前		考古學一二・一
高津帝國鐵器研究所高津分工場		包	J・中		史前三・四
野川		包	Y		考古學一〇・一〇
野川ヤカマス台		貝	Y・J		考古學三・一二
南加瀬		包	Y		考古學五・六
〃	子母口	貝	J・前		史前四・一
〃	北加瀬字金山	貝	Y		考古界三・一二 神奈川縣遺跡史跡國寶重美綜覽
〃	久末	包	J・中	打石斧・敲石・石鏃	〃
〃	大日	包	Y	石皿・凹石・石錘	〃
〃	十三菩提	包	J・前	磨石斧	〃
〃	向丘長尾	貝	Y		〃
〃	平	包	J	石器	〃
〃	神木	包	J	石器	〃
〃	權現堂	貝	Y		〃
〃	生田枡形城跡	貝	Y		〃
〃	楠生上廐生月讀社附返	包	J	打石斧・磨石斧・石鏃	〃
〃	王禪寺	包	J	石棒	〃
〃	早野	包	J	石斧	〃

西岸丘陵地區（神奈川縣横濱市）

鶴見區下末吉町小仙塚		貝	J・後	土偶・石器・骨角牙器・人骨	石野瑛
〃	不老台	包	J・前Y	石鏃・石鏃・敲石	〃
〃	別所池端	包	J・後		〃
〃	上台	包	J・中Y		〃
〃	上末吉町江戸山	包	J・前Y	石斧・石鏃	〃
〃	梶山	包	J・前		〃
〃	駒岡町長塚原	包	J・前	石斧・石劍・石匙・石鏃	大山柏、宮坂光次、甲野勇
〃	獅子ヶ谷町	包	J・前	純鹹 石製裝飾品・礫器	石野瑛
〃	北寺尾町別所台	包	J・中後	石器	〃
〃	淨水場	貝堅穴	J		〃
〃	上ノ宮	包	J・中後		桑山龍造
〃	駒林	貝	J・前	揣鉆石	〃
港北區日吉町下組殿袋		貝	J・中Y	磨石斧	甲野勇
〃	下組（東）	包	Y・J・前	磨石斧・石鏃・骨針・釣針	八幡一郎、大給尹、河北展生、本會
〃	下組（西）	貝	J・前	主鹹	〃
〃	下組（南）	貝	J・前		〃
〃	矢上谷戸	貝	J・前	石斧・石鏃	清水潤三
〃	日吉台慶應義塾構內	貝堅穴	J・前		江坂輝彈
〃	箕輪	貝	Y		西岡秀雄
〃	役場附近	貝	J・前	石斧・凹石	大場磐雄
〃	下田町	貝	Y	主鹹	森本六爾
〃	折本町東原杉山社西方	貝	J・中		
〃	孤立	貝堅穴	J・前	骨針・管狀骨器・有孔角器・打石斧	直良信夫
〃	吉田六間丁	貝	J・後		大場磐雄
〃	新吉田町字貝塚	貝	J・前		石野瑛
〃	神隱	貝	J		〃
〃	宮ノ原	貝	J・前		〃
〃	獅子鼻	貝	J		〃
〃	北川	貝	J		〃
〃	大棚境	貝	J		〃

〃	新羽町新羽原	貝	J・前		〃
〃	〃　中ノ窪	貝	J		〃
〃	南山田町西谷	貝	J		〃
〃	〃　南堀	貝	J・前	イヌ	〃
〃	南綱島町小學校裏崖上	貝	J	石斧・匂玉・石匙・石鏃・骨器	〃
〃	太尾町大倉山研究所	包	Y		〃
〃	師岡町熊野神社附近	貝	J		〃
〃	高田町中井興禪寺裏	貝	J		〃
〃	〃　赤沼神社附近	貝	Y	石鏃	〃
〃	荏田小黒谷	貝	Y		〃
〃	下谷本	貝	J		〃
〃	菊名町宮谷	貝	J前中Y	磨石斧	杉原莊介
〃	〃　妙蓮寺裏	貝	Y J	打石斧・貝輪	大場磐雄
〃	〃　對甲台	貝	J・前	土錘	松下胤信、江坂輝彌
〃	〃　菊名驛南方	貝	J		松下胤信
〃	樽町	貝	J	純鹹	〃
〃	下菅町	貝	J・前	純鹹	〃
〃	大綱	貝	Y		〃
〃	篠原町仲手原武相學園農場	包	J・後	石斧・土錘	大山柏、宮坂光次、甲野勇
〃	〃　慈雲寺墓地上	包	J	石槍・土錘	〃
〃	〃　富士塚	包	J	石器	森本六爾
〃	〃　一〇八〇	包	J	石斧	石野瑛
〃	〃　二五〇〇（錦ヶ丘）	貝	J	石斧・土偶	〃
〃	〃　表谷	貝	J		〃

註

△J・前、J・中、J・後とあるは、それぞれ縄文式前期、縄文式中期、縄文期後期、Yは彌生式である。

△古文は古代文化、史前は史前學雜誌、考雜は考古學雜誌、人類は人類學雜誌、考評は考古學評論、考論は考古學論叢

△貝は貝、塚包は包含地（ただし散布地を含む）

この表で見られる如く、多摩丘陵一帶は縄文式前期の遺跡が壓例的に多く、本貝塚もその一つであることがわかる。多摩川流域は石器時代遺跡ばかりでなく、古墳の分布の濃密な地域で、石器時代以來長い間、ここに古代文化が榮えたことが知られる。

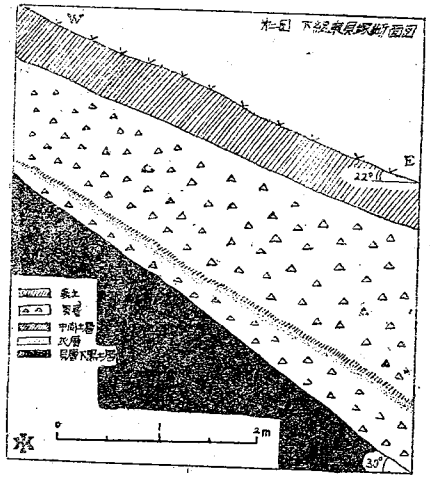
現場へ到着したならば、直ちに發掘に移らず遺跡附近を歩いて地勢、附近遺跡との關係について調べる。下組貝塚は日吉驛から西北へ一粁弱の所の丘陵の斜面にある。この丘陵は多摩川の西岸によこたわる多摩丘陵の東端から多摩川へむかつて突き出したところで、北側に矢上川、南側にその支流が流れている。この丘陵（矢上支丘と假に呼ぶ）は、南側の小流のなす谷をへだてて、本校のある日吉支丘と相對している。日吉支丘も多摩丘陵の東端をなすもので、矢上支丘と平行して多摩川へ突き出している。矢上川はこの二つの支丘と多摩川の間を流れているもので日吉支丘の南方で鶴見川と合流しているものである。多摩丘陵が多摩川をへだてて相對するのは、武藏野台地である。下組貝塚の局部的位置は矢上支丘の先端より奥へ二粁の丘陵南側に入り込んだ二つの谷に挾まれた幅約三〇〇米の岬で、三ヶ所にわかれて存在する。岬の東側の斜面にあるものが今ここで述べる東貝塚である。石器時代の貝塚は一般に、このような河川或いは海、湖等に接近した丘陵上に存在し、平地には存在しない。では、更に附近の遺跡を調べれ見よう。まず最も密接なものとして、岬の上部にある南貝塚と、その西側斜面にある西貝塚がある。これらの貝塚はみな同じ文化をなすものである。矢上支丘の南側をずつと奥に入つて、丘陵の最奥に達すれば高田貝塚があり、逆に丘陵の先端部へ出れば東横線のすぐ西側に矢上谷戸貝塚、彌生式の住居址、矢上古墳等がある。その突端は本校裏側から望み得る觀音松古墳である。矢上支丘から小流を渡つて日吉支丘へ至れば、日吉町の南方に糞輪貝塚があり、本校の新グランドの裏手に彌生式の竪穴がある。更らに南側を流れる鶴見川をへだてる菊名方面の丘陵地帶、或いは多摩川の彼岸の太田區、世田ヶ谷の台地、多摩丘陵の兩側は多數の遺跡が存在する。

附近の調査を了へて貝塚へもどつたならば貝塚の所在地を地圖に記入し、次は發掘地の選定である。塚と云つても地表に小山をなすものではなく、貝殼が平坦な土地に散布しているだけである。貝塚の形狀はこの貝殼の散布狀態を見れば大體判明するから、ボーリング棒によつて貝塚の層位狀態を探り、適當な場所を選ぶ。遺物は貝塚中央の厚いところよりも、緣邊の薄い部分の方が多いと云われている。本貝塚は丘殼の斜面の上下に至つて、南北に擴がつて約二〇米長徑の半月形をなして居り、その北半分は大山史前學研究所により、その南半分は本校文學部考古學研究室によつて既に調査されているので、我々は斜面中央上部の未發掘部分を選定した。このような際、既掘の部分を豫じめ知つて置かぬと無駄骨を折る。我々が最初掘り始めた部分は丁度この既掘部分で、貝層に達して初めて二枚貝に合わさつたものがなく、貝殼が細かに碎けて層がグズグズになつていることにより既掘部分であることを知つた。發掘地がきまつたならば長さ數米の細長いトレンチ（試掘坑）を掘つて層位狀態を知る。貝塚は一般に表土で覆はれ、その下に貝層があり、その厚さは五〇糎から一米位であるが厚いものは二三米に達する。貝層の下には褐色土層（沖積層）が堆積して居り、その下はローム層、所謂赤土である。貝層には貝殼のみにより成立する純貝層と、土まじりの混土貝層とがあり土、灰等の薄い層―中間層―によつて層位の分かれているものもある。本貝塚は大體五十糎の厚い表土で覆はれ、貝層は斜面であるから急で、三十度の傾斜をなし、丘の下部に至るほど厚くなり、丘陵上部で一米二〇、下部で二米二〇と云う厚さで土層と灰層により上下層に分れる。混土率は少なく、大層は純貝層で、中間層も貝殼多く、從つて不明瞭であり、丘陵の上部に於ては殆んど中間層は消えていた。貝層下土層は厚く、ロームに達するに至らなかつた（第二圖）。

四

發掘方法にも種々ある。中間層があり、層位により遺物が異なる場合は、上から一層ごとに發掘して層位により遺物を區分して置かねばならない。これが層位的發掘であるが、トレンチから次第に前方へ進む方法もある。我々は後者を用いた。本貝塚では中間層はあつたが不明瞭であり、上下層とも遺物は同種なものであつたから、トレンチよりそのままの幅で丘陵上部へむけ發掘を進め、東西に長く約十米平方を掘つた。このような斜面貝塚にあつては、上部を掘つた土によつて、下部の既掘部分を埋めつつ、下部より上部へむかつて掘れば便利である。發掘地は方形がよく、不整形に掘り一部のみ前進したりするのは適當でない。發掘は今回は表土が厚かつたのでそれを除くには鍬とシャベルで掘つたが、遺物を包含する層位に至れば遺物の破損と見落しを防ぐ爲にシャベルを捨てて馬鍬を用いねばならぬ。更に完全な土器を出土した際は直ちにこれを掘り出さずして周圍から序々に竹箆と指頭を以つて掘り、全形を露出せしめるようにする。遺物は人工遺物のみでなく、貝類、獸魚骨等の自然遺物にも注意し、貝殼も一種類ごとに數ケづつ持ち歸る。

遺物には今述べたように人爲的に製作された人工遺物と、動植物の遺殘や鑛物等の自然遺物がある。貝塚では貝類から溶解するカルシウムによつて有機質遺物の保存が良く、他の遺跡では腐蝕してしまう骨角器、獸魚骨、人骨等が出土する。人工遺物の主なものをあげれば、石器には石斧、石鏃、石匙、石槍、石錐、石棒、石錘、敲石、石皿、玉類、裝飾品等があり、骨角器には針、錯、銛、釣針、鏃、斧、裝飾品があり、貝器には貝輪等があるが、最も量が多いのは土器である。石器時代の文化は土器によつて代表されている。貝塚出土の土器の大部分は縄文式土器であるが、彌生式土器もあり、彌生式文化にも多少貝塚は存在する。本貝塚出土の土器は全て前期の縄文式であり、これに就ては後述するが全て破片のみで復原し得るものはない。石器には礫塊の片面を打ち缺き、他の面を磨つて、その交はる部分を刃とした半磨製石斧が二ケ、打製の無柄石鏃が一ケある。骨角器としては骨製の針を二ケと骨角器の未成品を出土した。前回の發掘では釣針の發見が多かつたと云う。自然遺物は次の如くである。



第二図　下総貝塚斜面図

神奈川縣横濱市港北區日吉町下組東貝塚自然遺物

- I、軟体動物
  - a、斧足類　ハイガヒ・サルボウ・アカガヒ・イタボガキ・マガキ・スミノエガキ・ヤマトシジミ・カリガネエガヒ・ウネナシトマヤガヒ・ハマグリ・カガミガヒ・ナミマガシワ・オキシジミ・アサリ・シホフキ・ミルクヒ・イソシジミ・マテガヒ・オホノガヒ・イタヤガヒ
  - b、腹足類　アワビ・イシダタミ・スガヒ・カワニナ・イボウミニナ・ウミニナ・キクスズメ・ツメタガヒ・アカニシ・レイシ・イボニシ・バイ・アラムシロ・ナガニシ・サザエ・ヒメキセル・ナミキセル・オホケマイマイ・ヒダリマキマイマイ・カハアイ・トコブシ
  - c、堀足類　ツノガヒ
  - d、頭足頭　カクイカの一種
- II、節足動物
  - a、甲殼類　アカフジツボ・フジツボの一種・カニの一種
- III、脊椎動物
  - a、魚類　サメノ一種・エヒの一種・コヒ科の一種・ハモ・ダツ・ボテ・マアジ・ブリ・スズキ・ヘダヒ・クロダヒ・マダヒ・チダヒ・キダヒ・コチ・カナガシラ・ヒラメ・カレヒの類
  - b、鳥類　種名不詳
  - c、哺乳類　キノシシ・シカ・イヌ・タヌキ・アナグマ
  - その他　灰・木炭・果實・綠泥片岩・黑曜石

ハマグリが最も多く、ハイガイ・カキ等がこれに次ぎ、殆んど鹹水（海）產である。貝塚は鹹水產貝類と淡水產貝類の混合率によつて純鹹、主鹹、鹹淡、主淡、純淡に分類される。即ちこの貝塚は主鹹貝塚である。いのしし、しかの多いのは我國の貝塚に通有なことで、石器時代に於いてその數が非常に多かつたことが考へられる。

さて、これらの遺物が發掘されたならば、土器を袋に、骨角器等の細かい物は小箱に入れ、木炭、果實等の脆弱なものは綿によつてくるみ、小箱に入れる。完全乃至はつながると思はれる土器片は復原の際、便利なように夫々分けて袋に入れる。整理の際に於ける便宜の爲、各々の容れものに、カード出來れば荷札をつけて地點、層位その他、記憶すべきことを記して置くと良い。發掘中には、遺物の檢出のみならず記錄が必要で、重要遺物の出土の際は、發掘部位、出土狀態をノートし、撮影を行う。遺物の包含は貝層下土層にまで及び、發掘はロームに至る迄行なはれる。ロームに達した場合、その面が堅く固められているような時は住居址の床面と思はれるから、この固められて平坦となつた面を擴大して發掘を續ける。貝層下に住居址のある場合は大抵貝層はロームに直接している。ロームに遺物を包含することは殆んどないが、もし發見の際はローム層は洪積世に於ける堆積であるから二次堆積或いは縄文式文化以前の遺物であるかも知れず、細心の注意を以つて發掘を進行する必要がある。かような場合がない時は一定の範圍をローム迄發掘すれば發掘は完了する。

五

發掘が終了すると我々は實測に移つた。まず貝塚の全形を、附近の地形と共に測量して貝塚平面圖の下書きを作つて置き、その中に正確に記して置く。これは後の研究者の爲にも、又發掘品の占める位置を知る上に於ても必ずなして置くことである。次に發掘部分の貝塚斷面を測量し本貝塚の如き斜面にあるものに於てはクリノメーターによつて傾斜を計る。これも下書きをして置く。又、貝層斷面を完全に露出せしめて撮影し、貝塚の全景も撮る。スケッチも實感をよく示すことに効果がある。これで野外作業（フィールドワーク）は終了するのであるが、歸る前には必ず發掘地を埋めて元通りにして置かねばならぬ。發掘品を持ち歸るのにも運搬に種々の考慮を要するが、本貝塚は學校迄僅かの距離であり、且つ一日少部分の發掘であつたから、發掘品はその日に持參して歸ることが出來た。

六

發掘品を研究室へ持ち歸つたならば、今度は室内作業（ラボラトリーワーク）に移る。まず土器の泥を刷毛で以つて水洗して落す。洗はれた土器は乾かして、發掘部位に從つて分類して箱に入れるか、すぐ整理に移る際は机上に擴げて置く。下組貝塚の土器は纖維土器と呼ばれる多量の纖維を胎土中に混入するものなので非常にもろく、水洗いをすれば破損のおそれがあるので、陰干しにして後、刷毛で泥を落した。土器以外の遺物も水洗い等により泥土を落さねばならぬが、遺物に塗料の着いている物は水洗いをすると塗料がはげてしまう。

洗つた遺物は次に復原せねばならない。土器はみな破片となつているから、これを全て机上にならべる。一ヶ所に置いてかたつて出土した土器は接合し得る可能性があるから、現場でひと纏めにして置いたならば、それを一ところに集めて置く。他のバラバラになつた破片は文様、形態、色調、厚さ等によつて分類し、割れ目を接合して行き、接合なる部分はチョークで印して置く。下組出土の土器は繩文、貝殼文、條痕文無文等數種に分類し更にそれを形態に從つて口縁、腹部、底部の三者を縱に並べ、色調に從つて横に並べて復原した。この時に、土器について認識されるのである。接合可能な土器は接着が行なはれる。接着劑はセメダイン或いはツアポンラックを用いる。土器はカーブを持つているから平面上では接合しにくい場合が多いので、平箱に砂を滿たして接合した土器をたてかけるとよい。復原した土器で、破片が不足した部分は石膏で充塡する。土器以外の遺物骨角器、獸魚骨などは接合し得るものは接ぐ。貝類、動植物、石塊等の自然遺物に就てはその種名を明かにせねばならない。我々は動物圖鑑を使用したり、持ち合せた知識をもつて調べたが、その全種名を判明する爲には、どうしてもこの方面の專門家によらねばならない。

復原が終つたならば次は保存である。相當大きな形をなす土器は棚或いは他の適當な場所に安定して置く。他の土器片は平箱に分類して入れて置く。石器の中でも石鏃、石匙、石錐等の細かいものや骨角器自然遺物は、ガラスをはめたボール紙の標本箱におさめる。その際、箱内には

綿を入れて遺物をガラス面に密着させて固定し、又取りはずしに便なるようにする。植物等の破損しやすいものは保存に特に注意せねばならず、ガラス器に密閉して、日光のあたらぬところに置く。ようするにこれらの遺物については、夫々發見地、品目等必要な記載をしたカードを必ず添へて置く。

七

これらの遺物は更に資料として生かされねばならない。それにはまず遺跡・遺物等を復製することである。最初に寫眞であるが遺跡の寫眞は既に撮つたから、今度は撮影する。寫眞を傳へるものであるから次の二者と必ず並行して用いられる。次は實測圖であるが、これは實際の大きさを正確に傳へるもので、光澤、立體感等は寫眞によつて補う。費用は寫眞よりずつとかからぬが、土器片など迄、實測するのは大變であるから、大形に復原し得た土器、骨角器、石器等についてこれを行う。實測圖には鉛筆・コンパス・定規等を用いて方眼紙に畫く。細かいものは方眼紙上にあてて輪廓をとれるが、大きなものは各部について計測し、それを實大或いは縮尺して書く。特に土器面のカーブを描くには最近、竹ヒゴ製の測曲器が用いられている。なお實測圖は、後で墨を用いてペンで書いとかぬと、不鮮明になるし、製版出來ない。實測するのにわずらはしい土器片とか、凹凸のある文様を有するものなどは拓本を行う。最も一般的なのは濕拓で、畫仙紙又は綿紙を遺物に當て、刷毛で水をはき綿でその上を輕くたたいて凹凸面に紙を喰いこませ、乾きかけたところをタンポに墨肉をつけて叩くと印影が刷れる。

さて、復寫が濟んだら次に報告を書いて、これを資料として提供することである。報告は我々の觀察した事實を正確に簡潔に、記述するもので、報告と論文は異なるものであるから、報告に勝手な意見は交へられない。報告内容の例として、我々の報告した下組東貝塚調査報告の項目を次に擧げよう。

緒　言――過去に於ける研究の紹介等
位　置――遺跡附近の地形
發掘經過――發掘地點・貝層の狀態等
自然遺物
文化遺物――（石器・骨角器・土器）
結　語――調査結果による考察
後　記

報告する際には、實測圖、出來れば寫眞・拓本等を添へる。又、發掘した貝塚の過去に於ける研究の結果等を調査して置くべきである。

八

では、以上の調査からいかなる考古學的研究がなされるかを述べて見よう。

遺物を見せて最初に聞かれることが、大概「これは何時頃のものか」と云う質問である。それほど遺跡遺物の年代は重要であると共に、絶對年代のみ理解する人々に對して、答に窮するのである。文獻のない石期時代に於ては絶對年代（年數を以て示される年代）と云うものは現在の段階では不可能に近い。しかし、地質學、氣候學、外國考古學との關係から遺跡遺物より絶對年代を導びこうとする努力は行なはれて居り、三千年前より八千年前の間に、種々の年代が想定されている。そこで、現在では新舊の順列を明かにする相對年代が確立されねばならない。その方法としては第一に層位學的方法がある。これは擾亂されていない遺跡に於て、層位によつて遺物を異にするかを觀察するもので、下層出土のものは上層のものより古いと考へられる。次は型式學的方法で、これは遺物に型式分類を行い、型式は原始型より最盛期に達し更に退化すると云う假定によつて配列するものである。その他には貝塚は當時の海岸にあつたものであるとして、海岸線の移動と土器型式との關連から土器の編年を行う方法があり、これは日本の沖積世には海浸があり、貝塚はその浸入せる海が後退し始めた頃から營まれたものであると云う考へから導びかれたものである。以上の三方法はいずれも土器を基本として行なはれているが、それは土器が最も多く、且つ最も變化を示すものであるからである。現在、關東地方の繩文式土器は大體次の如く分類されている。

早期	台式 荷式 草式 稲井式 戸式 三田式 下層式 戸上層式 田戸式 子母口式 茅山式	前期	花積下層式 關山式 黑濱式 諸磯式 十三坊台式
前期	五領ケ台式 阿五台式 勝坂式 加曾利E式	後期	堀之内式 加曾利B式 安行I式 安行II式 安行II—III式 安行III式

これを又、細分する人や或いはこれの一部を除く人などもあつて一定せぬが、ここに示した型式をそのまま編年とすることには問題があり、大勢は前期・中期・後期と推移したとしても地域によつて複雜な推移が行なわれたと思はれる。下組貝塚の土器は、花積下層式に極少量の茅山式を交えるもので、多くは繩文、ハイガヒ貝殼の殼背を押捺した厚手の頸部のしまつた甕形のものであつて、多量の纖維を胎土に混入している

では、この貝塚が積成された頃の自然環境はどうであつたろうか。出土した魚介類の習性から考へれば、當時の東京灣は多摩川沿岸の沖積平野に浸入して居り、下組貝塚は兩側に遠淺の海岸を有する岬に積成され、海岸には一部に、淡水、岩礁等もあつたと考へられる。而して、當時の人々は、この岬の上部に生活し、兩側の斜面に不要物を遺棄していたのである。魚介類からは當時の氣候も略ぼ推察される。即ちハモ・ダツキダヒ・ハイガヒ・イソシジミ等の現在、東京灣には殆んど見られない暖糸魚介類が發見されているので、當時は現在より暖かいとも考へられるが、寒系のイタヤガヒも發見されている。前期の貝塚ではハイガヒの出土が多いので、繩文式文化の前期は暖かいと考へられている。貝塚の附近は、海岸であると共に、森林があつたらしく、猪・鹿等の森林系動物が存在して居り、當時の人々は漁撈や貝の採集により海幸を得ると共に狩獵により山幸を得て居り、かたわら植物採集によつて、本貝塚でも出土した果實類を拾集していたのである。以上が下組貝塚積成當時の生活環境であるが、最後につけ加へたいのは發見される遺物の名稱である。石斧と云い、石鏃、石匙と云い、いずれも形の類似から呼ばれた名稱であつて、必ずしもその用途を示すものではないことに注意すべきであつて、多くの歴史書、參考書には、遺物の名稱はあげられていても、その器能については説明を缺いているので、名稱即ち用途であると云う誤解を生じやすい。

× × ×

以上は下組貝塚を例として貝塚の研究方法を述べたものであるが、これは我々の研究の紹介であつて、これを讀まれる人々の實地研究の爲のものではなく、無許可の發掘は文化財保護法の施行により禁じられて居り、遺跡の盜掘は學問の進歩を妨げるものである。

しかし、これらの研究を念頭に置かれて、附近の遺跡を散策されて、我々の學ぶ日吉の丘の地形を知り、祖先の過去を偲ぶのに、この小編が資するところがあれば幸甚である。（考古學會々員）

參考文獻

甲野　勇「先史考古學入門」
大場磐雄「日本考古學新講」
酒詰仲男「貝塚の話」
中谷治宇二郎「日本石器時代提要」
藤森榮三「續石器と土器の話」

アーダルベルト・シュティフターについて

黒田壽郎

魅惑的なボヘミヤの森、紫に霞む山肌、澄み渡つた碧空の下に散在する素朴な家々、こう云つた環境の中で育ち、自然と共に生活しその懐に眠つたシュティフターを論ずるに当つて、最も重要な問題と言えば、測り知れぬ自然環境の彼に與えた暗默の教化である。

遠く機械文明から隔離された、汚れを知らぬ僻地ボヘミアに、人間本來の資質を失なはずに棲息している人間の姿これのみが彼の創作の對象であつた。

ヘーゲル逝き、ゲーテ去つた獨逸に於ては文化總體の根本的な轉回の機が訪れた。觀念論の崩壞と共に隆盛を極めた浪漫主義の燈火も、一應こゝで消え果てた形を取るに至つた。亦佛蘭西革命の惹き起した人心えの衝撃は、統一的な文化圏の喪失と相俟つて、混迷の中から或る新しい目的の爲の再出發を強く促した。抬頭して來た自然科學は絶對的な信條を打破し、社會主義的な政治思想は舊來のそれと眞向から對決した、其處には必然的に對立に惱む多くの精神が彷徨して居た。最早や詩人がより高い、或はより深い現實を發見し創造するのではなく、詩人は何よりも先づ自己の先人の發見と創造とに依つて養はれた知性の認識した現實と對決しなければならなかつた。しかしその方法、態度は非常に分散し、作家の個性が作品中に以前の統一的なそれより更に強く、亦廣範圏に反映される樣になつたので文學史家の樣に「浪漫主義より自然主義に至る過程に於ける現實主義は、二つの大流に分け得る云々」と言う言葉は當を得ていない樣であるが、兎に角感情と知性、空想と現實と云つた矛盾の解明、或ひは統一と云う問題を浪漫的に考究し、その分裂に惱んだ Heinrich Heine (1797-1856) を主導的立場に置く所謂青年獨逸派の一系列 Christian Dietrich Grabbe (1801—1836) Fendinand Freiligrath (1810—1876) Georg Büchner (1813—1837) 等と、一方凡そ時代的精神とは沒交渉に僻地に住み、自己の故郷と周

圏に棲息する人物、或ひは存在に對して深く内省しつゝ、世に多くの佳品を殘して逝つた一群の、と云つても散在的な作家達がある。デュッセルドルフには Karl Leberecht Immermann (1796—1840) が、ヴェストファーレンには Annette Droste-Hülshof (1797—1848) が、スキスには Jeremias Gotthelf (1797-1848) 彼等より稍々若い Eduard Mörike (1804-1875) がシュワーヴェンに、そして Adalbert Stifter (1805—1868) が遙かなる邊境ボヘミアに居るのである。この樣なあらゆる現實の主潮からの隔絶と、日常的なもの、靜謐なものえの強い執着は、世界に對する或る深い苦惱を暗示する。彼等は一見非常に「非時代的」に見え勝ちではあるが、ニイチエが自己の方法を「反時代的考察」と呼んだ事と或る共通なものを感じ、亦後に此の「非時代的」なと云う言葉が如何に皮相であつたかを知るのである。樣々な現實の葛籐を客觀化し、その内奥に存在する人間の本質を討究する爲には、多くの俗念から離れ、遠隔の地から現實を見守ると云つた立場が却つて望ましかつたのだ。それだからと云つて彼は、決して現實から遊離した存在ではなかつた。彼の精巧緻密な、且つ詩的な現實描寫力を一讀した丈でもその證明の一半と成り得るだらう。彼は現實に生き、現實を愛し、その内に光輝あるものを認識し無上のものを希求したのだ。ビイダアマイヤアの低俗な藝術一般の中に文學のみ燦として輝くのは彼の功に負う所が多い、併しこの樣な讃辭も謙讓な彼にとつて一顧にも値しない事だろう。

アーダルベルト・シュテイフターは一八〇五年十月二十三日、ボヘミヤの森の東部モルダウ河畔の小邑 Oberplan に孤々の聲をあげた。父は實直な織匠で、物商をも營んでいたが、彼が十二才の折に不慮の死を遂げた。初等教育は土地の家庭教師に受け、後にオーストリアの Kremsmünster の修道院に入學した。青く連る山々、清らかな溪流の水、周圏の純朴な人々の心が、少年アーダルベルトに終生忘れる事の出來ぬ印象を與えた事は否めない。父の死に依つて彼は弟達と一緒に農業・牧畜の仕事に就いたりして種々の辛酸を嘗めたが、遂に一八二六年 Wien の大學に入つた。學課は Goethe と同じく法科だつたが、彼と同じく亦自然科學に興味を魅かれ、歴史、數學、天文學はもとより、地質學、動植物者を研究しその深い造詣が彼をしてあの網密な自然描寫を可能にさせたのだ。彼の對象に對する恐ろしい程客觀的な科學的な態度は、彼の資質にも依るがそう云つた彼の修養に影響されている所が多い。更に彼が當時畫家を志望し、その畫才も相當に認められていたと云う事も彼の文章に尖くその片影を浮ばせている事が理解出來る。學費の不足から家庭教師等をしていたが亦サロンに於ても詩人、畫家、俳優等とも廣く交際した。中でも彼の尊敬す

る Franz Grillparzer (1791—1872) とは長い友誼が續けられた。夏になり、サロンが寂れると故郷に歸り法律の學位等は放擲して、遠近を畫帖を持つて放浪した。

一八二八年故郷滯在中に Fanny-Greipl に初戀をし結婚を申し込んだが両親に拒絶された。この現實家は「歎く代りに男らしく胸の中に收めて置く事」を心得えて居たが、其傷心は處女作 Kondor のテーマとなつてゐる。後に類ひなく美しい、アマーリエ・モハウプト(Amalie Mohaupt)を知り、一八三七年に結婚した。この愛の動機は「虚榮心と自尊心と復讐慾」だつた、とフアニイに宛てゝ告白して居るが、誇張の少い五十才の彼をして妻に向つて「私は今、お前が二十二才の華やかな、形容も出來ない程美しい娘であつた時よりずつとお前を愛してゐる。お前もこの變り者で氣紛れな老人を、若い、天地をも破壞しかねない青年よりも愛してゐる。そして、この愛は段々少くなるのではなく、寧ろ增大して行つて、もし私達に高齡が與えられるとしたら私達は全く一つのものに、同じものになるのだ」と書かせた事からは、彼が靜かな内にも變らざる、深い愛を持つてゐたといふ事が窺はれる。

彼の作家としての誕生には次の様なエピソードもある。一八四〇年の春、彼は處女作 Kondor の數頁を公園で書き初め、それをポケットに入れたまゝ知り合の婦人を訪ねた。たま〳〵彼女の娘が彼の原稿を見つけて、お話らしいから讀んで呉れとせがんだので、已むを得ず書きかけを朗讀したが、この物語は若い娘が空を飛びまわるお伽話風の物語りなので子供は大層喜んだ。こゝで彼は初めて自己の讀者と同時に時分の資質とを發見した。そして次々と矢次早に勞作を世に送つた。一八五〇年ヴィーンに移り小學教育の改革案を詳細に起草すると共に、無給で教育にたづさはりたいと云ふ請願を提出し、それが許されて一八六五年迄こゝの視學を務めた。畫間は忠實に職務につき、夜になると創作に終止した。この時代に書かれた作品が、彼の珠玉の様な作「礦石さまざま」である。

晩年の彼はあまり惠まれなかつた。先づ第一に彼の様な思想の持主にとつて、子供がなかつたと云ふ事は非常な苦痛であつた。その上養女のユリアーネはドナウ河で投身自殺をした。これ等の生活上の苦惱は作品の上に非常に判然りとした形で反映されてゐる。一八五七年に上梓された長篇「晩夏」は Friedrich Hebbel から「この書を最後迄讀み終へた者にはポーランドの王冠をやる」と迄惡罵された。併し彼は更に非効果的な—外面的に—作品 Wittiko を書き上げた。そして翌年即ち一八六八年一月二十八日永い間惱まされ來てた肝臟癌の痛みに耐えかねて枕頭の剃刀で自ら頸を切つて死んだ。死顏は憔悴し切つた苦惱に滿ちた相をしてゐたと云はれる。

一月三十日、彼の葬儀は多くの子供達に守られて、丁度

「水晶」の暗示する様な靜かな雪の降る中でとり行はれたそうである。

シュティフターの藝術はヘッベルの所謂退屈な小說、とニイチエのこれこそ繰り返し繰り返し讀むに値する少數の散文、と云う二つの對蹠的な評語の内に良くその姿が浮彫にされてゐる。「礦石さまざま」の序文の中で彼は、火山が熔岩を吹き上げる力も、貧しい女の鍋の中の牛乳を沸き立させ吹きこぼす力と同じものである」。と云つて一面的一時的なものから全體的普遍的なものえの希求を說いてゐる。彼にとつて激情的な、巨大な、ドラマティックな要素は只單に皮相的な存在に過ぎない。彼は外的な人間葛籐の底を流れる永遠の眞理を反時代的な背景の中に、現實的に捉えそれを作品中に具現したのだ。ニイチエの云つた「現世的な神經と慾念と打算の破棄をもつてこの書に臨まねばならぬ」と云つた態度こそこの作者を知るに應はしいのだ。

彼の云う愛とは決して浪漫家のそれの如く高踏的な、非現實的なそれではない。「男やもめ」の中に見られる如く彼の幸福は、遠隔の彼岸に於けるそれでなく、明らかに現實に根ざして居るのだ。若い愛し合つてゐる夫婦を前にして彼は息子を持たなかつた老人に言う。「世代の連りは長い鎖を辿つて最も若い子まで下つて行く、併し彼は總ての世代から抹殺されてゐる。彼の存在は何の像も殘さず、彼の裔は時と共に流れを下らない」と、彼には絶對と云つた空虛な存在は無かつた。人間の幸福を肉體を持つた人間相互の關係に定着させた事は、當時の自然科學的な風潮や、J・J・ルソオの系を踏む佛蘭西の影響があつたとは云え、思想上の一つの偉大な功績であつたと云はねばなるまい。又今述べた様な親子間の人間的な、現實的な愛の繫りは、必然的に横の關係にも影響して來る。十八、九世紀の浪漫家の作物の影が薄れて來つあるに反して、彼の作品が Rainar Maria Rilke 'k Hans Carossa に再認識され、現代に於ても尙遜色を見せぬのは、こう云つた内面的に現實的な立脚地に依るものだらう。「晚夏」や「石灰石」の内に流れる高貴なヒューマニズムと、深い道德性とがよくこの事を物語つて呉れる。

彼は淳々として叫ばない、彼の追求したものは何千年もの昔から暗默の中に幾千の世代を經て、尙親から子え、子から孫えと脈々と波を打つて變る事なく流れる人間存在の本質である。古代から現代えと決して絶える事のない超論理的な存在だ。實存主義者をして絶望から行動せしめるもの、ユミュニストを革命えと驅り立てる力、そう云つた存在の原初的なと云うより根底的な何物かが、淡々と書かれた文字の間に光輝を發してゐるのだ。靜謐な彼の著作が生えの限りない渴望を忽然として湧きたゝせたのを私は身を持つて感じた。

彼が邊境ボヘミヤで日々を過した、と云う事は決して何も彼が其處で安易な生活、畸型化された生活を送つたと云う事ではない。其の爲に私は彼の生活と史的背景と言う事について、サント・ブーブを眞似て、幾分冗長に亙らうが記述したのだ。それは一人の人間を評するに當つて當然とる可き基礎知識の可能性を滿足するものだからだ。

一見彼の作品の上には、バーネット張りの要素、或る安易さが散見される。併し彼が如何に現實に生きたかを考えその「アブデイアス」卽ち現代の約百に暗示された彼の幾多の苦惱は、腦中に於いて晶解され、更に發展されて、默從の態度の內にその安易さの陰に潛んでいるのだ。總て絕叫を避け、あらゆる嘲笑罵詈を尻目に、純粹に叙事的意志を持つて書かれた彼の作品は、往々にしてその眞價を認められ難い。成程彼の藝術の中には純粹な抒情性はないし、—これは單に表現形式の相違に於ける結果かも知れない—又思想の直載性等と云う事とは凡そ緣遠い、併し外觀的に看て、その理念は解るのだが、眞の藝術的戲曲とは凡そ掛け離れた、最近屢々散見されるアジプロ芝居の存在とか、高きに至つてはトーマス・マンやロマン・ロランの持つ幾分非小說的な要素等を究明して見ると解る樣に、純粹な藝術としての思索表現術は理想として、彼の樣な立場が望ましいのではないかと思う。だからと云つて思想性を排除せよと云うのでは毛頭ない、彼等はその小說的な表現術が稚拙なのである。

その上彼には表面的な劇的（ドラマティック）な要素は前に述べた樣に只の一片もない。併しこう云つたものゝ缺除が小說としての眞價を損なうとは思はれないし、寧ろ彼の場合には却つてそれが價値を昂揚してゐるのだと惟う。ニイチエの狂いかかつた晩年を慰め得たものは、「晩夏」に於いて代表せられる敍事詩的な要素とその背後に超然として孤獨と忍從に耐えた彼の不屈の作家的態度であつたと思う。

彼は当時の獨逸の作家としては珍らしく、只一冊の抒情詩集をも創り得なかつた事を嘆いた。彼がこう云つた資質を持ち合せてゐなかつた、と云う事は外面的に看ると著しく彼の文壇えのデビューを遲らせたのであるが、その間の苦惱・思索・內省・自然科学えの深い造詣と云つた彼の人生・社会・自然えの觀察力が、諸經驗を透して彼に一つの偉大な表現上の武器を與えた。

全作品に漲ぎる事象の客觀的描寫、精密な科学的表現、それを支配する繪畫的な文章、—私には土地の親近性に依るものか Worpswede の畫家達の新奇を衒はぬ、潤る樣な風景畫を想い起す、それはアルテユール・ラムボオの詩「感動」の中に彷彿と表現されている「ボヘミア」の言葉の持つ魂の鄕愁を唆る象徵を含めた意味に於いて感動的だ—その上、私には理解出來ぬが、リズムの爲に行なはれる語尾變化の變更、語の配慮等の周到性は評家が口を揃えて

絕讃してゐる。そして彼の文體の齎し出す、平靜な一貫した淸純なムードは高級な寶石にも優るとも劣らぬ童話集「礦石さまざま」の內の「水晶」を初め、種々と形相を變えて全ての作品の內に眠つてゐる。而し從來何者をも成し得なかつた克明さの內に、此の樣な魅力を創成したのだ。浪漫家は絕體的なもの、非現實的な魅惑的な、抽象像卽ちそのもの—言葉と云つた方が適切かもしれぬ—の腦中に釀成する浪漫的な、高踏的な世界像と云うものを、美辭麗句を並べて、我々に只單に空想力を驅つて想像して慾しいと强要したのだ、彼等に於いてはムードとは卽ち單語の持つ所謂美しい經歷とか抽象性、魅惑性に過ぎなかつた、その世界には極く晶化された高踏的なかげろうに搖らぐレアリテしか存在しなかつた。斯樣な意味に於いて我々は、如何に彼からスタイルについて学ぶ事が多いかを知るのである。

前述した樣な意味に於ては、彼の浪漫的な要素云々と云う問題は無價値であるが、或る人が「浪漫主義そのものは人間の思老や生活の樣式の全領域に亙る問題で、要約すれば、時代に對する進步發展、その革新へのイデーであり槓である」。と云つた意味に於ては、彼は確かに靜かな、併し乍ら却つて巨大なエネルギイを含蓄した浪漫家であつた、と云う事實は、前記の事柄が、ニイチエが「偶像の薄明の」中で「ゾラ、惡臭を發するよろこび」。と云つた。十九世紀自然主義文學の單純な描寫的作物と、彼のそれとを相比較して見れば直ぐ解ると惟う。結局煎じ詰めて見ると浪漫的と云つたものは彼の求めて熄まなかつた人間の本質の或る一面かも知れない、生えの希求・行動・革命の推進力の原初的、根底的なものゝ存在する作物にあつて、この事實は前のそれと對比して、論理的必然性を持つて彼の終生變らざる浪漫主義者であつた事を立證する。

ところが文學史家達はこの事實を極く曖昧に、時代的に處理するのみで、所謂文學史上現實主義と呼ばれる云々と、彼の眞價などは全然考慮せずに、職業的な狹い範鑄で作品を恰も蝶と蜻蛉を分類するが如き態度で左右し一括してゐる。こう云つたダイジエスト的な態度は、單に彼の價値を知るに充分でない許りか、名作をまざ〳〵地底に葬るの蔽を冒し易く、更に又古典の近代的解明に齎らす惡影響は著しい、この樣な評價が現在彼をして殆ど無名の、外見上無價値化された態度を以て世に迎えられる所以なのである。

「南獨のチロル山中、黃金色の空氣を浴びた古い胡桃の樹の間に、周圍は森にとり卷かれているが、一方が開けて雲か山かを見まがふ許りに遙かな、魅惑的な展望を持つ山腹の草原に一つの小さな町がある、村とも町ともつかぬこの町は、傳說に依ると、下の谷間にある都市がペストに襲はれたときそれを避ける爲に逃れて來た人々に依つて作られたものだと云う。純潔な生活のそういう高處の小さな町と

そシュテイフターの藝術の象徴だ」とドイツの或る批評家が云つてゐる。

こう云つた高處の清澄な空氣は現代の苦患に滿ちたそれと異り、非常に晶化された美しさ、明るさに溢れているから、往々にして我々は思念を眩まされ、その光澤を曲物として見、惹いては彼の作物を冗慢であると斷じるかも知れない。併しこれ等の作品を讀了した後には、必ず忘れ難い印象と、美しい經驗とに滿たされるだろう。彼の内には、何度も云う様に本質的に劇的な葛藤はない、詰らぬ評家に云はせれば、此の點を責める事必定である。併し我々人間性の發展のために教化を乞う者にとつては、その様な皮相な存在ではなく、より内奥の精神的な糧のみが必要なのではないだろうか。彼の態度は文學史上特異な存在であり、現代小説とは全く本質的な相違を持つ、そこには更に心理描寫の不完全さも見受けられるかも知れない。併し我々は彼を追究したものを想い合はせ、アミュージングな要素とか、或る程度の足りなさを超えて彼の言に耳を傾けねばならぬ。又こう云つた態度こそ古典の現代的な解釋に無くてはならぬ要素である。

彼の後期の作品の實存的な解明も、ニイチェの讃辭の影に灰に感ぜられぬ事もないが、私の菲才をしてはの感もあり、又シュティフターを讀む事僅かなので筆を擱く事にする。（ドイツ語研究會員）

作品年代表

「習作」Studien)〔一八四四—五〇〕
一八四〇 大鷹 Kondor　一八四〇 野の花 Feldblumen
一八四〇 荒野の村 Heidedorf　一八四一 喬木の森 Hochwald
一八四一 氣狂ひ域 Narrenburg
一八四一 曾祖父の書類入 Mappe mines Vrgrossvaters
一八四三 アブディアス Abaias 一八四三 古い封印
一八四四 ブリギッタ Brigitta
一八四四 男やもめ Der Hagestolz
一八四四 森の小徑 Der Walasteig
一八四五 二人の姉妹　一八四五 記しつけられた樅の樹
「礦石さまざま」Bunte Steine（一八五二）
水晶 Bergkristall　花崗岩 Granit
石灰石 Kalkstein　電氣石 Turmalin
白雲母 Katzensilber　石乳 Bergmilch
「物語集」
一八四四 運命の三人の鍛冶屋　一八四七 森の散歩者
一八四八 プロコープス
一八四四 子々孫々 Zachkommesnchaften
一八六六 森の泉 Waldbrunnen 一八六六 ゼンツヱの接吻 Kuss von Senze　虔敬な箴言 Der fromme Sprache
「一八四二年七月八日の日蝕」

ラフカディオ・ハーンのこと

今橋　朗

今年はラフカディオ・ハーンの生誕百年記念の年に當る。英文學の作品を讀んだ者ならば誰でもポーシャの鉛の小箱や、イノック・アーデンの波の音や、スクルーヂの祈りの言葉や、又王龍の素朴な姿をすぐ思ひ起すことが出來る筈である。しかし日本人としての我々がそのすぐ身邊に生れた英文學作品に案外疎いことを殘念に思ふのである。しかしこのラフカディオ・ハーンといふ文學者を、シェイクスピア、テニスン、バイロン、ディケンズなど英國の作家や、アーヴイング、ステイヴンスン、ポオなどアメリカに於る人々と同一視出來ないと言うことも十分うなづけやう。英米諸國に於てハーンが東洋の古い國を描いた少し毛色の變つた作家であり、珍しい南海の風物を書いたステイヴンスンと同じ様な存在であることが不思議ではない。それが特に日本人としての我々に、彼を他の人々と同一視出來ないという理由は彼の日本に於る生活と我々との深い關係から來ている。その生誕百年の記念に當つて、彼のことを考へて見るのもさほど無駄なことゝも思はれないのである。

幾世紀の昔、偉大な嵐の吹き起つた處ギリシャの西北にアイオニア群島と呼ばれる島々がある。その中でもアポロの宮殿がそびえオリーヴの森に包まれた特に美しいレフカーダ島に於てラフカディオ・ハーンは呱々の聲をあげた。こゝに彼の數奇な小説的な生涯が始る。當時アイオニアは英國の保護領であつたから、イギリス海軍に籍のあるアイルランド人、チャールス・ハーンと、土地の娘ロザ・シッテマとが小説的に結ばれて、ラフカディオの兩親となつたとしても不思議ではない。この島の名にちなんで洗禮名を與へられたハーンは、その父の西インド轉任と同時に、母と共にアイルランドの首都ダブリンに移り住んだ。こゝで聖ジョージ海峡の霧を眺つゝ育つたハーンは「海を愛し、旅を愛する心」を植えつけられた。さて、我々が今手近に目にすることの出來るハーンの寫眞や肖像がほとんどすべて、彼の右半面のみを示しているのに氣付くであろう。このおかしなことの理由となつた事件は、彼が、一八六三年に入學したイングランドの歴史古いローマカトリックのアッショウ・カレヂで起つた。學友の投げた繩があやまつて彼の目にぶつかり、それが原因となつて遂に失明してしまつたのである。もと〳〵神經質なこの子供がだん〳〵内氣になつてしまつたのも仕方のないことであらう。しかしこの芥むした學園の中で彼の作家としての才能は既に芽をふきだしていた。

その頃のロンドンの文壇には、テニスン、ブラウニング、ラスキンが活躍し、ドーヴアー海峡の彼方にはユーゴー、フーフローベール、ボードレールが第一線にあつた。これに刺戟された譯ではないがハーンは海を渡つてフランスへ留學した。こゝでもやはりカトリックの學校へ通つたが、不愉快なことが多く後にすつかりローマ舊教の嫌ひな人になつてしまつた。一八六九年はハーンの生涯に新しい面を開いた年であつた。彼は太西洋の荒波

を押し切つてアメリカ合衆國へ渡り、シンシナティ、ニューヨーク、フイラデルフイア、ニューオルリアンズなどの新聞社に勤める側ら貧困の中を數々の優れたフランス文學作品を流麗な文章で英譯し、その數二百篇余であつたと言はれる。元來アメリカではコンテイネントの作品は余り飜譯されず、讀みたい人は原語で讀むのが普通であるやうだが、それらを新聞の連載小說として一般大衆に紹介した彼の働きは、大なるものがあつたと言へやう。一八九七年、大都會ニューヨークの壓力に耐えかねたハーンは、佛領西インド、マルティニク島のサン・ピエールに赴いた。そこはあのアイオニアの島々と同樣、光と色彩とに滿ち溢れた自然であつた。やがて歸米したハーンに又もや一大轉機が—我々に極めて關係深い事柄が—訪れた。ニューヨークに歸つたハーンを、西インドの風光にも增して强く捕へて離さなかつたものは雜誌「ハーパー」に紹介された極東の島國の美術と文學とであつた。

カナダのヴアンクーヴアーを出航したアビシニア號がハーンの「旅を愛する心」と「旺盛な好奇心」とを乘せて太平洋の長途の末、横濱に姿を現はしたのは一八九〇年—明治二十三年—四月のことであつた。「私はこの國で死にたい！」初めて日本に接したハーンの口をついて出たのはこの言葉であつた。我々が一つの事物をよく識らうとする時、我々自身がその中に埋れ、溺れていたならば、その形をはつきりとつかむことは出來ない。一度そこから脫け出して外に立つて、冷靜に眺めた時はじめてその長所、短所、性格、特徵を識ることが出來る。日本のことは日本人の我々が一番よく知つている。しかし一方、日本人であるが故に氣付かない事も多くある。その我々に、外からの日本を示してくれたのがハーンであつた。

來日してハーンが英語教師として最初に赴任したのが松江であつたことは彼にとつて幸ひであつた。出雲の國は日本のあけぼのゝ地であり、古い日本の姿が殘つている。先づ「純粹な日本」を識ろうとするハーンにとつては極めて都合の好い所であつた。しかし當時の日本は—現在はどうか知らぬが—歐米化思想の華やかな時代で、すでに神戸や横濱は西洋文明の皮相を眞似た、みにくい町に變つていた。ギリシャに生れ、英佛に育ち、アメリカに暮したこの「西洋人」は、この傾向を極度に嫌ひ、その作品「蕪萊」の中でかう書いている。

「今、西洋の邪惡な風が蕪萊の上を吹きまくつて居る。そしてその靈は悲しいことに萎縮し去らうとして居る。」

一八九〇年、ハーンは日本人である妻子のことを考へ、又長年月を要するであらう自分の研究のことも考慮に入れて、日本歸化の手續きをとつた。

「八雲立つ、出雲八重垣—」と古歌に詠はれた大好きな出雲の國の歌の中から「八雲」をとつて名とした。小泉は妻の苗字である。この間に、ハーンは書き續け「Kokoro（心）」「Gleaning in Buddha Fields（佛土の落穗）」「Out of the East（東の國から）」は當時の作である。

・やがて東京帝大に招かれて上京したハーンは、東京の塵垢から逃れる爲に、度々靜島縣の燒津を訪れた。黑潮の流れに抱かれた此の地には未だ「純粹な、素朴な、淸潔な日本」が殘つていた。しかし氣の弱いハーンを苦しめ始めたのは、キリスト教國の人間—ローマ・カトリックの學校に學んだ人間としての自分にもう一度目を向けた時、そこに歐米の社會や教會の非難が集つていると思つたことであつた。文際を嫌ひ、人間仲間を嫌ふやうに

なつたハーンが、憂愁と凄愴な氣持で書いた作品の中には「Kotto（骨董）」「Kwaidan（怪談）」「In Ghostly Japan（靈の日本）」などがある。これら怪談ものをものする時の市ケ谷の丘上のハーンの屋敷には凄愴の氣が立ちこめ、さながらお化け屋敷の觀を呈するのであつた。その上地續きの隣りは杉の老木立つ並ぶ墓地であつた。一九〇二年、東京帝大を辭めると同時に長年の教師生活に終止符を打つたハーンは、外國の大學に於て講演すべき「日本の精神、歷史、將來」に關する原稿をまとめた「神國日本」を書いた。そしてもう既に、ロンドン大學、オクスフォード大學、及びアメリカの諸大學から講演依頼が殺到していた。しかしハーンの死期は迫つていたのである。

ハーンの作品を見ると、それらが「單なる」物語でないことが解る。眞劍な研究と考證—これが常に彼の作品の土臺である。しかし研究論文や隨筆が彼の作品を代表すると考へるのは、間違ひである。實際、彼の偉大さは物語—小說を通して我々に迫つて來る。ハーンの物語は、研究によつて得た資料を、彼の非凡な咀嚼力と、創造力と、表現力とで新たに作られた彼の「創作」である。しかもそこに盛られた日本は、外國人である彼の創造の筆を加へられる時、併せて非日本的要素を加へられることが無い。

パール・バックはその著書「母の肖像」の中で「私は一國民、國家といふものを個人の複數と見た」と語つているが、ハーンも一人の人間、一つの出來事、一つの物語の中に、古い、深い日本の姿を見たのである。そして彼の作品の中に流れるものは「美」と「神祕」への限りない讃美と、愛情とである。

日本生活の大部分を教職にあつて送つたハーンは、日本の短所の一つとして、そのスクールシステムの無理や、學校設備の貧弱さをあげて語つている。

「僅かな米と豆腐を食べながら、莫大な數の漢字、ひらがな、カタカナ、それに英語迄を使ひ分けつゝ、ビーフステーキや、ハムエッグスで榮養づけられた腦の作り出す產物—西洋文化をのこらずつめこまれる日本の學生程あわれなものはない。そしてその重壓のために彼等は全く創造力を失つている。しかも彼等は下らぬ事からも何か教訓を引き出さうと一生懸命になり、一つの事物に教訓めいた理屈を押しつける。」と。

ハーンは教育の偉大さを何よりも高く評價し「すべてこの世の惡は、無智の結果であり、教育ある者が少しでも正義に近い判斷を下し得ることは間違ひない。一つの國を對外的に高く評價させるには何人もの故治家よりも、一人の詩人の方が重要である」と言つている。

一九〇四年、九月二十六日の朝、ハーンはその長男に向つて「Pleasant Dream!」と一言殘し、五十五才のハーンは十四年間の八雲の生涯を閉ぢたのである。

「日本人の文化が、日本の文化だ」と我々に我々が父祖から受けついだものゝ貴さをもう一度はつきり認識させてくれたハーンに向つて、今度は我々が「Pleasant Dream!」とつぶやくのである。

そして神戸の道で白いワイシャツや、光る靴に眉をひそめ、横濱の街角で英語を聞いて耳をおほつたハーンが、今、TOKYOの横文字のサインの下を、ジャズに合はせて派手なシャツをひるがえす國籍不明の男を見たなら何と言ふだらうかと、無獸な想像までめぐらせてみるのである。（英語會會員）

黄道歸還

田中隆尚

歸りこし道に麥の穗黄に照らひほそほそ遙れてゐたりけるかも

ほそほそと風吹きゐたり道の邊の麥の穗ゆりつつ風吹きゐたり

たまきはる命死なずて麥の穗をふたたび見たり黄なる麥の穗

癒えて歸るわれの心はいひがてぬ麥の穗みつつ歩みきにけり

今しわれ歩みゐるなりたまきはる命生きつつ鵠沼の道を

癒えて歸る吾を見たまはむ母が目を一目を欲りつつあゆみ早めつ

癒えてかへるすべなき吾とおぼしけむたらちねの母は泣きてゐたまひき

——歌集「黄道歸還」より轉載——
（ドイツ語教官）

田中隆尚先生は第一高等學校に御在學中、重い病ひを得られて入院、一たびは不治の病といふ絶望を經驗されたが幸ひにも全快の觀びを與へられた。死の影に覆はれた長い闘病生活から解放されて歸る鵠沼の道のあたりには一面の麥の穗が夕映えの中で黄色く照り輝いてゐた。〃黄道歸還〃の歌七首はこの時の感動的な印象を詠まれたものである。これは當時一高の文藝雜誌に掲載されたが、今度編集委員の希望として、こゝに轉載させて載いた。

編集委員

〝きけわだつみのこえ〟に應える

生き殘つた人々は沈默を守るべきか

今宮雅敏

それは單なる惡夢として思い過せるものではない。それらの日に血を以つて書き綴られた日本戰歿學生の手記「きけわだつみのこえ」は終戰後五年再び殘虐な戰爭の危機が醸成されようとする今日のわれわれに多くの問題を投げかけるとともに、ともすれば當時の氣持を忘れかけているものには大きな警告を、そして自由を守ろうとするものには限りない勇氣を與えずには置かない。

嘗つてあのいまわしい帝國主義戰爭となつて、或は遠く絕海の孤島に、或は大陸の荒野に「魂の自由を抵當に入れた」爲にみじめにそして限りない戰爭への憎しみを殘して死んで行かねばならなかつた學徒兵達は今日のわれわれに「平和だ。平和の世界が一番だ。」という叫びとともに「全人類を破滅に導びこうとする戰爭に抵抗し、固い團結の下に平和を打建てよう。」と力强く呼びかけている。歷史の暗い谷底で「遠い殘雪の樣な希みよ、光つてあれ―。」と衰えてゆく精神に叫び、「人間らしい心の動きを中斷され、押しながされた樣に學生としてのインテリジェンスの目覺めもすべて中途で斷ちきられ」ながら祖國と學問を限りなく愛した學徒達は、戰爭に對して「手さぐりの理性を働かせて」批判を進め、多くの矛盾や疑惑にひかれながら滿腔の苦惱を胸中に秘めたまゝ唯默々として死んで行つたのである。

戰後の渦まく世相、その渦潮の逆卷く中から劇しく生れる無數の泡。その一つ一つがはかなく消えるのではなく嚴しく競いあうこの現實。これをわれわれは茫然と見守つて來た戰爭の終つたことを喜んだわれわれは、戰時中に於けるインテリの逃避の何であつたかを痛感した以上こんどこそ現實に負けまいと努力して來た。けれども個人を併呑する化物の社會の胃の腑の中でわれわれのつぶやきは米粒の一つにも當らないことがまざ〳〵と感ぜられた。社會は決してわれわれが考えていた樣な方向に進まなかつた。更にまた世界の潮流はわれわれの視野の彼方で動いていた。たゞ親潮と黑潮との衝突の飛沫が、この島國にどうひゞいて來るかだけは、潮風の變り具合からいやでも感じないわけにはゆかなかつた。そして今窮迫したわが國の現狀を見るとき、嘗つて學徒兵を戰線に追いやつた軍閥と同じファシズムの暗い魔手が再び人間を「將棋の駒」の樣に動かそうとしていることにわれわれはかすかな不安を持たないわけにはゆか

ないのである。

試みに學園をながめよう。學問と思想の自由を守り、平和を叫んで立ち上つた神戸大の小松攝郎氏を始めとする進步的教授は次々に學園から追放され、これに反對する學生を押えつける爲に白塗りの混棒を持つた警官が、丁度十數年前京大に侵入した樣に、今再び學園を蹂躙しようとしている。北大の守屋教授がイールズ氏を圍む座談會で語つた樣に「日本に於ける大學の歷史をふりかえるとき、約廿年前に多くの大學教授が共產主義者の名の下に投獄され、その結果自由主義者・キリスト教徒まで追放された。」という日本の暗い過去と、その結果學園は官憲の彈壓を受け學問の自由は失われ、ひたむきに戰爭への一本道にかり出されわれわれの友が、そして兄が無殘に死んで行つたことをまだわれわれは忘れてはいない。

しかし歷史は繰りかえされる。そして平和を求めるノーモア・ヒロシマの叫びは廣汎な人々を呼び覺し、反戰の大きな燃火となつて燃えあがつている。そして今われわれがたゝなければ、そして戰爭に反對しなければ、それは歷史は繰返すことを證明する手助けになる以外の何者でもないことをわれわれはその輝かしい炬火によつて知つたのである。

街を見下そう。そこには疲れ果てた、貧乏な四等國日本の姿がある。「文化國家の象徵」であるきたない工場、バラック建の粗末な家箱庭の樣な工場が並んでいる。きたない工場では自分の、そして自分達の家族の生きる爲の最低賃金を要求しても馘首され、小さな商店では世界的水準を上まわる稅金に脅かされて主人は靑くなり、差押えの自動車だけが我物顏に走りまわる。そして映畫館には日本人を馬鹿にする爲に作られた樣なエロ・グロ映畫が汎濫し、その廣告と一諸に生活苦に惱まされながら死んでいつた哀れな人々の自殺記事が連日日刊紙をにぎやわす。そしてあらゆる籤が出來、公營賭博である競馬や競輪が大繁昌しようというのに、中小企業は困窮の極に達し、大資本家は官僚と結びついて亡國への墓穴を掘る汚職、贈收賄が半公然とおこなわれ「つまみぐい」が流行しているとき舶來のチューインガムが、マッチが、石鹼が、そして中古衣料までが日本市場で賣られていることをわれわれは知つている。これが戰爭前夜の植民地風景の一駒でないと誰が斷言出來よう。現在のわが國に於ては憲法第二十三條に保證された「教育の自由」は勿論のこと、第十九條の「思想及び良心の自由」を始めあらゆる國民の權利は無視される。無視されるだけではない、吉田內閣は日本の自由も獨立も永世中立という國民の願いも賣りわたし、―日本人を馬鹿にし小學校でローマ字や英語は教えられても、國歌や日本地理は無視される。―戰爭の準備に大わらわである。戰爭への地ならしをするものが「治安維持法、共產黨員の逮捕、勞農黨などの解散、檢察及び特高の强化、言論・思想の彈壓及び學園への干涉」に始まつたことは東京裁判の判決文が明らかにこれを教えてくれる。

「演說や公開の催し物の原稿はすべて警察の承認を得ねばならなかつた。警察が不都合と考えるときはすべて押えられた。……一九三一年から後にこれらの特高警察は時の政府に反對する者と意見の公けの發表とのすべてを監督した。一九三〇年から始まつて著述家、講演家、論說記者たちは滿洲の戰爭を支持する樣世界を指導することに一致協力した。その年の末までにはこの政策に反對する者はすべてこれを抑壓する爲の措置がとられた。」

「平和を守ること、そしてその爲のレジスタンス、それこそ現代最

高のモラルである。」と柳田謙十郎氏が叫ぶとき、氏を含めた日本の知識階級がいまや良心のすべてをもつて平和を守ろうとする必死の姿を見る。廣島のあの慘禍は再び繰返えされてはならない。その爲に日本學術會議を始め、湯川博士を生んだ日本素粒子學會も、日本地質學會も、日本心理學會も、日本動物學會も、安倍能成氏を議長とする平和問題談話會もその他いろいろな團體や文化人が「平和を守る爲に全面講話を結べ」「軍事基地化反對」「日本の植民地化反對」等を叫んで雄々しく立上つた。

「知名の教授や研究者たちの他男女の參加者は數千と云われ、道路を埋めつくした警戒の巡査や憲兵は次第にその數を増した。そのうち何處からともなく〃大臣バルコンに現れよ〃という聲が起ると皆これに唱和してたゞちに怒濤の如くどよめく。」

佛中央科學研究所長の馘首に抗議文を送る科學者のデモを湯淺年子はこう傳えている。「自由を守る戰い」は決して孤立したものではない。ヒューマニズムは心臓の鼓動の止まらぬ限りすべての人類の中に流れているからである。

「彼等は眞理について多くを語り、彼等はそれで身を飾る。しかし行動する眞理ほど彼等の氣質を遠く離れているものはない。彼等は眞理をもつておのれの用に供する。」(過去よ去らばローラン)

これは第一次大戰直後のインテリの弱さであつた。かすかに「良心の灯」をともしながら、その無力と、弱さと、小さな自己溫存の爲に遂に團結出來なかつたインテリゲンチャはやがて自分が戰爭にまきこまれる危險を感じながら、遂に死んで行つた。しかし二つの悲慘な戰いを經た今日、學問言論の自由が不當に束縛され、社會全體が戰爭の危險に突入させられようとするときに、それを防禦するすべも知らず、その結果惹起された戰爭の渦中にまきこまれた血塗られた歷史を知つたときわれわれは默つてはいられない。何故ならわれわれは平和を守り拔くすべと勇氣を持つているからである。そして多くの人々も沈默をつづけはすまい。

われわれはナチスの占領下に於けるフランス・イタリヤのレジスタンスに依る勝利の歷史を知つている。ブロツフの「ツーロン港」は平和へのそれで反ナチのレジスタンスが、學生と勞働者を中心に思想の如何を問わず廣汎に戰線を統一してナチに抵抗し、平和を打建て遂に祖國フランスの危機を救つたことを述べている。この「きけわだつみのこえ」に於けるレジスタンスの精神は單純ではあるが極めて嚴肅に戰爭に反對し、平和を主張する精神である。それは單にかよわい人間性に基いたもので、充分理性的でなく、組織的でなく、又勇敢でなかつた爲に遂に悲劇から救われることは出來なかつた。生き殘つたわれわれはこの先輩のせつなの抵抗—それは泡の如く出來ては消え、出來ては消える弱いが、善意に滿ちたレジスタンスの精神—はわれわれの心の中に强く植えつけられた、この精神をいかに表せば戰爭の慘事を繰り返さないで濟むであろうか。

「わだつみのこえ」はわれわれに平和を破壞しようとする者に對するレジスタンスとそして平和を護る爲の推進となる力强い聲を告げてくれた。そしてそれは又平和への不斷の鬪いこそ必要であり、勝利の歷史は平和が團結と鬪いであることを教へた。

われわれは平和を愛し、自由を熱望し「戰爭はもういやだ。」と聲高らかに叫ぶ人々と手を結びその意欲と實踐に基く團結に於て戰爭反對を叫ぼう。われわれは限りない友情をもつて全世界の青年學生に決して相戰わざることを告げることも出來よう。われわれ一人一

人の胃の腑の中の小さなつぶやきを全世界の人々の一つの叫びに盛りあげるとき、そしてその爲に斷呼たる第一歩がふみ出れるときにのみ、この願いはかなえられ、平和は獲ち得られるのである。そしてわれわれ學生は學問が人類の平和と幸福への輝かしい努力に繋がるということ、そして民主主義も、學問も自由も、平和なくしては望み得ないことを知るであろう。

われわれは憎しみをこめて戰爭に反對する。今後戰爭を計畫するものに反對する。今やわれわれは沈默を守るべきではない。そしてわれわれはわだつみのこえの聞えるかぎり、私達が生きているかぎり、そして聲のあるかぎり反戰平和の爲にすべての人々と相携えて積極的なレジスタンスに立上らねばならない。これこそわだつみのこえに答える唯一の道であり、われわれ青年の任務であり、祖國に對する最大の愛であると私は考える。(一九五〇・八・二〇稿)

一學生としての反省

淺利慶太

——世界全体が幸福にならない限り
個人の幸福は有り得ない——
—宮澤賢治—

罪惡の日から五年の年月は流れた。

幼な心にも、暗い、不吉な怖えが感じられた頃の思出は、もうあれから五年も經つた今、未だ、心の片隅に宿痾のやうに殘つてゐる。私は今、戰後の學生の一人として、戰歿した學生達の七十數餘の遺文を讀むにつけ、深い感銘を禁じる事が出來ない。

それは〃楓の樣な手を上げて、兵隊さん万才を叫んで居た少年〃には知り得なかつた、戰爭と云う罪惡の眞の姿である如くも思はれたし、又〃灰色の青春〃を無意味な死に追ひ込まれ、死以外の何物も存在しない、暗黑の人生に、なほ且、生き樣とし求め樣として悶えた學生達の〃魂の呻き〃であるやうにも感じられた。

それは〃思想〃でも〃文學〃でもなかつた。しかしそこには思想をも、文學をも超脫した一つの大いなる存在がある如く思はれ、それが讀み進む私の心に深い感銘を與へるのだつた。

私は與へられた〃ものを書く機會〃のために、私の〃わだつみ所感〃を書きつゞつてみようと考へるのである。したがつて、それが眞の意味で應へる事になるかどうかは、私には判らない。

私には眞實を求めて思考し、思索して、戰爭が何故起るか、又誰がそれを起すのか充分知つて居たはずの彼等、自由を希み、平和を願つた學生達の多數が、何故彼等を死の深淵に陷入れ、彼等の周圍の愛すべき人間達の多くを、不幸に追込んだ、彼等の〃敵〃に對して戰い得なかつたか、結集して、レジスタンスを爲し得なかつたかを不思議に思ひ、又はがゆくも感じられた。しかし、それは瞬間的なもので、私にとつてその解明はたやすかつた。

冷靜に日本の歷史を振返つてみる時數百年を通じて、庶民階級暴壓の歷史に終始した日本は、その中に痛めつけられ、傷つけられた祖先の血と、封建制度に依り養はれた權力への服從を根强く國民性として持つた人間達の口として、早晩如樣な悲劇の訪れる事は、動

かし難い事實であつたし、又その場合、祖先の血を受けた彼等の大部分が、結局は屈服以外の何物をも爲し得なかつた事は當然の樣にさへ思はれた。そして更に、彼等をあの悲劇に追込んだ戰爭に對して考察する時、私は戰爭の根本原因とそしてその歷史的必然性とを知るのである。

かくして、自國の文化の美しく、誇るべき傳統を忘却し、ヒューマニズムの基盤を持たなかつた哀れな國民が、戰爭に自らを追込み自らを滅した事は、當然すぎるほどの當然であつたのだ。

長期間に亘つて、老朽し、腐敗した歷史の倒壞する寸前と云う、人間としての最大の不幸の中に生き、充滿した矛盾の中に、何らかに依り眞理を見出そうとして苦しみ、蹶いた學生達の足跡は、我々をして眞實の生活を生き、新らしい人間性の確立を希求する一つの道を覺らせしめたと云う事が出來よう。

運命の陰は、最初、社會情勢の進展に依る世界的な不幸の豫知と戰爭への不安となつて彼等を襲つた。誠意を持つた學生達は、もうその時すでに歷史の方向について知つて居たし、どんな不幸が彼等を襲ふのかも覺つて居た。不眞面な學生達が丁度現在吾々の大部分の者が經驗して居る樣に怠惰な生活の中に溺れて行つたのに對し、彼等は自己の內部に於て必死にそれを追求した。しかし、彼等の生きた社會は愚かだつた。彼等は自己の見出した眞理すらも他人に傳へる事が出來なかつた。周圍がそれをせしめなかつたし、彼等自身も勇氣を持たなかつた彼等の中のほんの少數の〃自己の意見を主張し得る人間〃は愚かな民衆に國賊と罵られ、或る者は獄に投ぜられ或る者は殺されたりした。これ等の出來事は大多數の學生をして一層沈默を守らしめた。

やがて日本が戰爭に突入し覆う事の出來ない不安が彼等を襲つた時、彼等の或る者は、もう自分が身動きも出來ぬほど纏りつけられて居る事を知つて。しかし大部分の學生は、この事すらも知らなかつた。實際は彼等の將來は眞直ぐ戰線に繫がれ、彼等の背後には銃口が待ち構えて居たのである。彼等は焦り、そして悶えた、しかし彼等は己れの意志とは反對に或る强力な力に引ずられたまゝ、ずるゝ〜前進して行つた。彼等の秩序ある學究の全ては混亂し、彼等の生活は破壞された、彼等の中、或る者は絕對權力への服從によつて現實を逃避し又或る者は瞬間の享樂を求めて生活した。

しかし、この樣な混亂の生活の中にも、知識人として己の理性を信じた學生達も居た、彼等は健氣にも己の前途を見つめ、逃れる事の出來ない運命に身をまかせながら、何時かは必ず來るであらう、「平和の世界」に想いをはせ、高貴な魂の安らかさを持ち、死の瞬間迄も人間への愛情を捨てず、戰う日本の良心となつた。死を寸前にして〃あゝマジェル樣、どうか憎む事の出來ない敵を殺さないでいゝ樣にこの世界がなります樣に、そのためならば私の體など何遍引裂かれてもかまいません〃と書いて青年は、其の時すでに〃戰爭の歸趨が國家總力の具體的表現とも云うべき國民經濟的生產關係の有する生產力である事〃を知り、〃それが個人の理想主義的努力を越えた運命的、必然的な力である事を〃知つてゐた。彼は〃わたくしがこの戰に勝つことがいゝのか、山鳥の勝つ方がいゝのか、それは私にはわかりません。みんな貴方のお考へ通りです。わたくしはわたくしに限つた樣に力一杯戰います〃と己の心境を述べて死んで行つたのだつた。又或る青年は

私は限りなく祖國を愛する

けれど

愛すべき祖國を私は持たない

沿淵をのぞいた魂にとつては……。

といつて死んだ。

けれども、〃戰爭と云う罪惡のシンフォニー〃は、そう云う個々の叫びには無關係に〃天白陛下万才を叫んだ者〃も〃恐怖の瞳を見開いて「お母さん」といつた者〃も、同じ樣に苦痛を與へられ、生命を失ひ一九四五年の夏迄に彼等のほとんど全てが戰爭の殘酷なそして凶暴な死のつばさにつゝまれ、もう我々の決して手のとゞかない世界に運び去られてしまつたのだつた。

悲劇がその第一部の幕を閉じ、惡夢の生活が過ぎ去つてから早や五年、幼い頃「楓」の樣な手をあげて「兵隊さん万才」と言つた事のある私は今、戰爭に對する絕對的な憎惡を持つてゐる。そして、一日本人として、我々の民族が踏み誤つて來た長い歷史を振返り、戰爭の根本原因を知ると共に、もう決してあの歷史をくり返さぬ樣に決意するのである。

わだつみの聲は結局、追いつめられた魂の呻きであり、誤れる人々の諦觀の現はれであつたのだ。私はこの書にこれ以上の價値を求めることは好まないし、又私自身求め樣ともしない。現在この書は廣い層の人間から讀まれてゐる。私はこの書が、戰爭挑發者に對する廣範圍な平和運動、レジスタンス運動の一端として萬人の腦裏に戰爭に對する深い憎惡の念を與へ、戰爭の不合理を知らしめ、平和理念の確立への大きな役目を果すならば、これを殘した七十餘の人達、ひいては數十萬の戰爭犧牲者の靈をなぐさめ得るものであると信じる。がしかし、私はこれを現代の聖典としおし頂いて感泣してみたり、反帝鬪爭の最前線にもつて行つて、大騷ぎする事に對しては何か割り切れぬ感情を持つてゐる。

元來この遺文集は、死を前にした七十數人の學生達が僞らぬ自己の告白を或る者は日記に記し、又或る者は父に、母に、兄弟に、友に、そして愛人に書き送つたものであり、全く個人の內的な生活の表現である。したがつてその中には前述した如く、無意味な死への疑惑があり、死をそれとして肯定した生き方も有る。私はどうも、これ等の遺作を大騷ぎして祭り上げる氣持には賛成出來ない。我々はもつと彼等の〃眞實の叫び〃を聽いてやるべきではなからうか。彼等の殘して行つた言葉を冷靜に聽き、世界史的な大きな觀點から批判し攝取する事こそ生きて居る我々の義務だと思う。

自己の生活に希望を求め、善意を持つ人間の一人として私は、閉じられた悲劇の幕を再び開く事のない樣に願ひ、〃世界全體が幸福にならない限り、個人の幸福は有り得ない〃と言う言葉をじつとかみしめるのである。

過去に於て沈默を守つたが故に、數千萬の人命を失い、偉大な不幸を招いた日本人は、世界に再び戰雲が濃くなつて來た今、今度こそは決し沈默を守るべきではないであらう。

☆懸賞論文『わだつみの聲に應える』は多數應募作品のうちから嚴選の結果左の通り入賞決定しました。

一等（一千圓）　三年　今宮雅敏（本誌所載）

佳作（五百圓）　二年　淺利慶太（本誌所載）

〃（五百圓）　三年　海津忠雄

〝戰を超えて〟

印東二郎

〝戰いを超えて〟は一九一四年、第一次世界大戰の勃發とともに全ヨーロッパが陷つた狂氣の中に在つて、藝術家であり歷史家であり思想家であると同時に、現代の最も偉大な良心の代表者としてのロマン・ロランが或ひはドイツの友達たちに、或ひはフランスの同邦たちに、或ひは世界の津々浦々に息づく良心に忠告し、訴へ、呼び掛けた十七の記錄をまとめた戰爭評論集である。世界大戰が直接的な影響となつて書かれた作物は、この他に長篇小說〝クレラムボー〟がある。

かつてジャン・クリストフの發表に依つて生に惱む魂達に勇氣と光明をあたへ、普佛戰爭後の混亂と世紀末的な萎縮した精神に低廻した社會に人間本來のそれが再來したかと見えたロランの偉大な魂は矢繼ぎ早に報道された。ドイツ帝國主義の背德行爲や、自國フランスに於ける意味の無い憎惡の感情に對して沈默を守る筈がなかつた。當時ロランはスイスのジュネーヴに在り、戰爭俘虜國際事務局の仕事にたづさはつて居たが、戰時に於ける文筆家の立場と使命は、ロランにとつては已に明らかであつた。實際フランスの銃後ではあらゆる作家がジャーナリスト同樣に思想の殺人を行ふ事に血道を擧げて居たのである。しかしロランは自由の精神と知性とを失ふ事なくして交戰國の一文筆家の爲し得る最善の行動を開始して居た。

戰爭の布告の後幾千もなくドイツが小國ベルギーの中立を侵害して全世界の非難の的となつたとき、その藝術と科學の都市ルーヴァンの破壞に對してロランはドイツの自然主義文學の巨匠ゲルハルト・ハウプトマンに宛て〝公開狀を送つて居る。――野蠻人の名を自ら拒否するドイツ民族ははたしてゲエテの孫なのか、(フン族の蠻王)アッティラの孫なのか?……。

更にヒューマニスト、ロランの眼は戰爭にともなふあらゆる罪禍、背德行爲、戰災を追求する。

しかしこの記錄に、一貫して見られるロランの態度は――これが問題の中心とならなければならない――〝戰いを超えて〟の序文にもある通り、「戰爭に襲はれた偉大な民族は單にその國境を防禦しなければならないばかりではない。その理性も護らねばならない。災禍のために狂ひたける錯覺、不正、愚劣から彼は理性を救はなければならない」ことに終始した。

しかし、刹那的に燃え上つた戰時フランスの熱狂はロランを容れることをしなかつた。その高潔な精神を理解しなかつた。反つてロランがドイツの知識人を專政者と同列に見なかつたこと、猶これ等の人々に尊敬をはらひ友情を保つて居ることに對して非難が起り、ほんの些細な言葉のあやから誤解を生じた。しかし、ロランの叫びは止まらない。〝ジャン・クリストフ〟や〝ベートヴェンの生涯〟によつて培われた名聲は破棄され內面の戰いは續けられた。

ジュネーヴと云ふ土地は身邊は安全に違ひなかつた。しかしこの記錄は安全な土地で一インテリのろうする繪空事の戰爭反對論であり戰爭の濁流におし流される弱者の力ない抵抗であらうか?。ロランは知つて居た。――この世界を膨大な罪禍に卷き込んだ少數に抵抗し得る者は誰であるかを知つて居た。ロランの眞摯な信念には、具體性の裏付けがあつた。その批判が、訴へが一筋にドイツのフランスのイギリスのロシアのすべての交戰國の知識階級に向けられていたのは何故か?。ロランが世界中の知性にその可能性を信じたからに他ならない。

しかし、ドイツの知識階級が行つた奇怪な行爲の成り行きを見て、ロランは〝二つの惡いもの、汎ドイツ主義か、汎スラヴ主義か〟の中で延べなければならなかつた。

――しかし、ドイツ人たち、ポーラランド人たちがあなたたちの國の支配よりも、ロシアの支配の方を選ぶのは、どうしたことだらう?――

ロシアの選良達が少くともツアーリズムに追從したことがないが故にドイツの知識階級よりましであると云ふ。

――私達ラテン人にとつて、知性の軍國主義化ほど壓倒的な息詰るものは、何物もないのだ。もしも不幸にして、このような精神があなた達とともに、ヨーロッパに於て勝利を占めることがあれば、私は永久にヨーロッパを立ち去るであらう。――

この偉大な思想家忠告があつたにもかゝはらず、この豫期された事は實に〝戰いを超えて〟が世に出てからわずか半世紀も經たない內に更は發展し再び世界をして恐るべき誤を重ねしめるに至つた。そして又多事多難な四十年もの年月をす送つた世界が亦來るべき戰爭の影からとき放たれて居ないとは。

――最も强い者がその傲慢な影で他の連中を壓迫することを絕ず夢み、また他のものは强者を打倒するために絕ず結束しなければならないのであらうか? 參加者たちの位置が世紀ごとに逆轉するこの幼稚な血腥ぐさい遊戲の終末は永久に來ないのであろうか。人類が完全に疲しつくすまで?――

アルベール・カミュの代表作〝ペスト〟を讀んで現代フランス文學の知性の高さに驚きを持たぬ人は無いであろう。今だ三十七才の若さで戰後二、三年の內にほとんど全フランスはおろか、全世界の若い世代の信望をかち得たこの作者自身がすでに驚異的であるが、同時に其處に書かれたペスト流行下にうごく人間達の像が代表する現代生活の抽象化された姿に愕然とした者も少くないに違ひない。

アルジェリア海岸に於けるフランスの一縣廳所在地オランの街を突如として襲つたペスト。その思ひがけぬ災害に對決する人間は決して勇壯でも健氣でもない。所謂カミュの不條理の哲學の眼が追求する人間、絕體は信じないが死と不幸のために戰はざるを得ない者免に角自分に殘されて居る筈の幸福を得やうとして無駄な永い怒力を續けるもの。ペストによつて發見された人間の近親性の故にペストの終廉を恐れる者のペストへの抵抗がこの作品の主題となるのであるが、それは一まずおくとしやう。ペスト發生當時から終末までの一般市民の感情はひたすら、何時かはおはるだらうと云ふ氣休めと、自分だけは疫病に罹らないと云ふ獨斷に終始する。その樣相はいかに原始的なおろかさに滿ちて居やうとも二十世紀の人間の眞實である。

しかし現代の倦怠、樂觀、無氣力……等の上に迫り來るペストが第三次世界大戰でないとは誰が斷言出來るだらうか。

この樣な末稍的で、矮小な精神も折々行はれる平和運動の片隅に表れることもある。それも何等根底になる思想もなく單なる虛榮の爲であつたりする。我々もレヂスタンスのつ

もりであつたり、平和愛好者の樣な顏をしたがこれは平和運動の署名をつきつけられた時にだけ燃え上り、すぐ樣無氣力の淵の中に沈んで行く。結極矮小な萎縮せる精神が貌を變へてあらはれたに過ぎない。

この樣な精神は眞に平和を愛好するものでない事は明らかである。

その樣な精神は戰禍の苦しみからのがれ度いと同時に平和建設のための苦惱にも參加する事を拒む者である。

前に戰爭に於て踏みにぢられる理性についてロランの思想こそが問題の中心になるべきであると書いた。戰災そのものを恐れてる戰爭にともなふ理性の喪失をおそれる良心は少ない。しかし本當に戰爭に抵抗し得るものはあらゆる權力あらゆる壓勢から理性を護らうとする意志以外の何ものでもあり得ない。その意味で三十六年經つた今〃戰ひを超えて〃の價値は何ら變るものでない。むしろロランの魂の大きさは時代を越えて生に惱む魂たちに勇氣をあたへるものであろう。特に現代、倦怠、無氣力の中に暮す我々は我々に向つて進展しおしよせ我々を一息にのみ込まうと機をねらふ〃力〃に對して故意に背をむけて眠をおほふべきだらうか？　それはあまりにも人間としての知性から緣の遠い行爲ではないか。——沈默そのものが一つの行爲であると云ふ事を忘れるべきではない。

ロランは敎へているではないか。——宿命とは意志を持たない魂どもの辯解だ。

終に付け加へておき度い事はこの幾多の記錄の內に流れる楚々たる諧調と皮肉である。何如なる名譯を以つてしても一たん日本語になつた以上その感覺を傳へることは出來ないし、我々フランス語を解せない者にとつてはわずかにその片燦を伺ふのみであるのは殘念な事である。この樣な場合特に、その言葉の端々等とらへて云々すべきではないかも知れないが、ロマン・ロランの革命劇に於て民衆的な主題が完全に藝術作品としてその位置を得て居る樣に、故鄕ニエーヴルに培にれ〃ゴラ・ブルニョン〃にあふれる同じ諧調が魂の苦惱と同列することは、決してほとゝぎすの卵がうぐいすの卵と同じ巢にあたゝめられる樣な矛盾ではない。かへつて知慧のよろこびがロランの精神の高さをうたつて居る。これこそが近代的な知性ではなからうか。

ロランは常に若く世界の若き魂と共にある。

（演劇會々員）

ロマン・ロラン「內面の旅路」について

安東伸介

偉大な文學作品を一つの形式に當嵌めて論ずることが不可能であるように、その創造者である偉大な文學者もある一元的な規定の下に論ずることは不可能であろう。偉大な文學者はもとより各々の時代精神の中に生き、形成され、發展するのであるが、その內面の世界は單に一つの藝術上の主義によつて解決し切れぬ數々の性格と條件とを持つ。偉大な文學者は文學史的潮流と無關係ではあり得ぬと同時に、それを超えた獨自なる世界として自由な存在である。かうした一元的な斷定を許さぬ自由な、複雜な性格は單に文學者のみならず、總ての藝術家に共通するところであろう。我々はたゞ個々の文學者の人間像に親しみ、全作品を通じてその獨自な世界を追求することによつてのみその文學を理解し得るのである。今、私の心を深く捉へて離さぬロマン・ロランは、まさにそのような偉大な存在である。

事實、私はロランほど博大な知性を知らない。

音樂家であり、歷史家であり、文明批評家であり、小說家であり、戲曲家であり、エッセイストであり、モラリストであると共に詩人であつた彼は、恐らくは西歐の生んだゲーテ以來の最大のアンシクロペディスト的知性の一つであろう。彼のかうした多樣な知性は必然的にその作品の性格を限り無く廣大なものとした。「ジャン・クリストフ」や「魅せられたる魂」などの大河小說の著者である彼は酒脫なスケルツォのやうな小說「コラ・ブルニョン」の作者であると同時に、社會的良心と正義とに貫かれた熱情的な小說「クレランボオ」の作者でもある。戲曲家としての彼はその歷史家としての深い造詣によつて「理性の勝利」、「愛と死との戲れ」、「七月十四日」などの優れた革命劇を創作し、民衆演劇の理想を實現しようとした。又、ベェトオヴェン、ミケルアンジェロ、トルストイなどの思想や力によつてではなく、「心によつて偉大であつた」英雄達の傳記はロランの叡智をこの上なく明瞭に示している。

詩魂と、革命的パトスと、深い叡智とによつて形成されているロランの世界は我々の現代史に燦然として輝く一つの金字塔であるがその多樣な性格と契機とは數多い彼の作品の一つ一つに接することによつてのみ解明さるべきであろう。ロランは極めて多くの問題を我々に殘して行つた。彼が生涯をかけて主唱し、實踐した樣々な課題は、今尙我々の問題として迫つて來るように思はれる。ロランの思想を理解し、それに對決することは、極めて重要な意味を持つている。「本質的に悲劇的」である廿世紀に生きる我々の憂愁と恐怖とは、ペストの猛威に傷つけられ、死の影の下に曝されたオランの市民達のそれである。ヒュマニスト・ロランの言葉は或るときは苦惱する我々への激勵として、或るときは生きる道への道標として、又或ときは危險な無知への警告として我々を搖り動かすであろう。

ロランの世界は如何にして誕生し、形成されたか。そしてその內面の奧底を流れる本質的、根元的な姿は如何なるものであろうか。

彼の、我々に殘した、精神的遺言ともいうべき自敍傳「內面の旅路」は、この問題への解答であり、ロラン研究のための最も重要な文獻の一つである。ルソーやゲーテの自傳に比せられる「內面の旅路」について說明する勇氣を私は持たない。それは音樂を言葉で表現しようとすることゝ同樣に無意味な試みであろうから。自敍傳「內面の旅路」は一個の詩である。それは、ロランが先づ何よりも偉大な詩人であつたことを物語つている。彼の代表的な傳記「ベェトオヴェンの生涯」に於けるような熱烈な絕叫をこの中に聞くことは出來ない。そこには靜寂な精神のヴェールに包まれた深い內面の囁きが聞こえる。私がこの優れた自敍傳を辿り內面の風景を眺めようとするのは、ロランをより深く理解せんがためであり、ここゝに書きとめる斷片的な感想は單に一つの覺書に過ぎない。シャトオブリアンはロランを稱して「偉大なる奉仕者」であると言つた。私こそ奉仕者の謙虛さをもつてロランのこの作品に向はねばならぬ。

「內面の旅路」Le Voyage intérieur は大戰の嵐吹きすさぶ一九四二年パリ・アルバン・ミシェル出版所から出版された。一九四二年にロランはレマン湖ヴィルヌーミのヴィラ・オルガで重い病ひを得、その快癒期にこの詩

的な內面の自敍傳を書いた。その序文（旅へのいざなひ）に明らかなように、これは「（日記）の記錄に基づいて書かれる回想錄とは全く別のもので」あり、そのための「一種の交響曲的序曲を形づくるところの」ものなのである。「內面の旅路」は從つて單なる自己の生涯の客觀的記述ではなく、創造的な夢の、詩の世界なのであるロランは自己の話の相手であつた一本の大きな胡桃の老樹と向ひあひながら過去の追憶の絲を辿つた。彼は自己の生を新らしく發見するために、一つの大きな體驗として、生涯をふり返つて考へた。だがそれは飽くまでも夢想の世界への旅であり、樣々な現實的な問題によつて夢の流れを斷ち切られたとき、彼はペンを「理性的人間に――（過去の事實の回想的記錄者）」に手渡した。

第一章――（落し穴）

「どこから僕は來たんだろう？　そして僕が閉ぢ込められている此處は何處なんだろう？……」

「自分はとらはれの身だ！」幼いロランの心を捉へた自己の存在への根元的な疑惑と原初的な束縛感とが述べられる。彼は自己を壓迫する獄舍のような雰圍氣から脫出しようとする。ロランが十六才か十七才で始めて「ハムレット」を讀んだとき、重苦しい束縛の中で深い憂愁の影に覆はれていたデンマークの王子の言葉は、彼に異常な衝擊を與へた。ハムレットにとつてデンマークが一個の牢獄だつたように、ロランにとつて世界全體が一つの大きな牢獄だつた。彼は、希望の道を彼に開いたハムレット中の一節を感激的に引用していう「――『おゝ神よ。私は胡桃の殼の中に閉ぢこもつて、そして自身を無限の一空間の王として見なすことが出來たらいゝ！』これが私の生涯の全歷史である。」

第二章――（三つの閃光）

こゝでは、ロランが少年時代と青年時代に體驗し、その生涯を通じて彼の內面的世界の根元となつて消えなかつた三つの啓示（閃光）が物語られている。ロランの生涯の河を並行的に流れる二つの生――それは物質的、有限的な「人物としての生」と、普遍的無限的な「實在の生」（內面の生）とであるが、三つの閃光は後者の存在を若いロランに明瞭に認識させた。

先づ第一の閃光は彼が十六才のとき、フェルネーの見晴し台から「古代アテネの彫刻帶のような」アルプスの連山を遠望したときに受けた決定的な衝擊だつた。彼はこのとき始めて自己と自然との內面的なつながりを悟つた。「私は知つた。――自分の最初の日以來私は自然のものであつたことを一。」

それから二年後ロランはスピノザの「エチカ」に於て第二の閃光を體驗した。彼はスピノザの言葉そのものの中にスピノザをではなく、未知の自分自身の姿を見出し「エチカ」の深い巢に自己の隱れ家を見出した。當時のフランスの精神的風潮は普佛戰爭の敗戰の結果絕望のどん底にあり、無氣力な世紀末的空氣は人々に逸樂的な生活を享受させた。かうした憂欝な、重苦しい苦惱の中でロランは自らの生き行く道を探究しないわけにはゆかなかつた。この時スピノザはロランの內面の據りどころを示す閃光だつたのである。「（確固たる永遠の諸事物）は（實在的）である。そして實在的なおのおのものは個性的である。（確固たる永遠の諸事物）は（獨自的）である。抽象は少しもない。在るものは、（諸本質）であり、（諸實在）である。おのおのものが（實在）である。」スピノザに感動したロランの次の言葉は印象的である。「醉心地が熱いの菊葡酒のように私をつらぬいて流れた　私の獄舍の門が開かれた。さあ此處に答がある。」私は先人の優れた魂の語らひの中に

自己のスフインクスの謎に對する答を見出すとき、この時のロランと全く變らぬ感動を覺える。ロランのこの言葉は私自身の言葉である。

第三の閃光は「トンネルの暗闇の中でのトルストイ的な閃光」である。ロランがエコール・ノルマルに入學する前フランスの北方を旅行したときのことであつた。汽車がトンネルの眞中で突然停止した。列車の中の灯は消え、人々は恐怖におのいた。だがロランは威嚇に充ちたトンネルの果しない暗闇の中で「戰爭と平和」の中のピエールと同じ「發見（悟り）」を體驗したのだつた。例へ世界が恐怖や威嚇や嫌惡や憤怒や又悲哀に充たされていようとも、ロランの世界は平和であつた。さうしたトルストイ的理想主義はロランの生涯を通じて生きている。

トラストイがロランに與へた影響について彼はいう。「美的には甚だ強く、道德的にはかなり強く、知性的には習無である。」一八八七年ロランは最も尊敬する藝術家トルストイに書簡を送り、自己の社會的義務と藝術家としての創作活動との間の矛盾に惱む心を訴へた。トルストイは無名の一學生ロランに返事を送りその惱みに懇切に答へ「藝術が持つ義務と責任」を說いたのであつた。この時のロランの感銘は其後彼が他人に對して果す義務を強く規定した。

第三章――（家系の樹）

こゝでロランは父かたと母かたとの先祖達の「顏を出現」させる。數世紀を通じてフランス以外の血を交へない「フランス中部モルヴアンの薔薇色の花崗岩の土地に生長した家系の樹」に實を結んだロランは、すべての不寬容を嫌ひ、狂信を忌むフランス的イロニイと、全世界全人類に對する同胞的愛情を父かたから、そして、敬虔な愼ましい魂を母かたから繼承した。前者はフランス革命以來の傳統的な合理主義的精神として、又後者は永遠なるものを求める完敎感情としてロランの生涯を貫いている。

ロランの多樣な知性の內奧を脈々として流れる二つの根元的な契機――合理的主義的精神と宗敎的精神はかうして彼の中に芽生えたのだ。この二つの精神が完全なユニテとなるとき、我々は最もロラン的な世界を見出すことが出來るのである。

第四章――（射る者）

これは本自敍傳の中でも特にくり返しくり返し熟讀さるべき珠玉の章であり、深く悅い啓示に滿ち溢れている。そこには生の全意義が探究されている。ロランはいう。「生は弓である。そして絃は夢である。（射る者）は何處にいる？」ロランのいう生の創造者とは何であろうか。眠れる生の弓を射る者は何處からやつて來るのであろうか。生の射手はいつ生に創造的な衝擊を與へるであろうか。この章に於て私は詩人ロランが自己の內面に最も深く沈潛している姿を見出す。「內面とは何處か？　外界とは何處か？…どちらが最も實在的か？」この言葉は「內面の旅路」のモティフではなかろうか。極めて暗示に富むこの章は人間存在の生の普遍的な表現である。

第五章――（愛・平和）

この章は青年時代ロランの自己形成に少からぬ影響を與へた彼の「精神の渝らぬ伴侶」マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの追憶である。歷史科の留學生として永遠の都ローマに滯在中にロランが識つた彼女は「澄んだ眼を持つ北方の純粹な『理想主義者』」であつた。彼女は嘗て、音樂家ワァグナァや詩人哲學者ニィチェの親友であり、眞のドイツ的理想主義者の魂の持主であつた。ロランは彼女に導かれてゲーテやシラーの文學を知り、又ワァグナァやニィチェ（六二頁へつづく）

ある女友達への手紙

——グルツクのオルフオイスに關連して——

林　光

その後、あいかはらずお元氣のことと思います。ぼくも今日、やつと試驗が終り、あの何とも形容しがたい腹立たしさ、心苦しさから解放されて、ようやく自分の中へ沈潛して行けさうな氣持になつたところです。

貴女ともゆつくり話したいことが山程あるのですが、新しい作曲にとりかゝつたりしているので、なかなかひまが出來そうもありません。せめて手紙ででもと思つて——どうも對話でなしに、自分一人で思つていることを書いてゆくのは苦手なのですが——ペンをとつたわけです。

さて……この前二人で話したのは、あれはたしか、八月の終り頃だつたかしら。「マヤ」を見たかへりでしたね。今年の春、毎日ホールで見た、木下順二の「夕鶴」の話からはじまつて、ぼくらがあの時、あんなに感動したのは、あのすぐれた劇が、何よりもことば、ことばの流れ、ことばの美しさを生命としてつくられ、舞臺全體が一つの音樂的感動としてぼくらの眼に、というよりむしろよりはげしくぼくらの耳に迫つて來たからだ、ということ、中村眞一郎が、彼の長編小說や定形詩でしつえうに試みているのも、ことばを中心とした一つの音樂的な統一である。ということなどから「音樂的感動」という問題に入つて行きました。そうしてぼくが「音樂」における「音樂的感動」は、すべてを「音」だけに賭けることから始まる、などと言い出したところで、丁度電車が來て、貴女はそれにのつていつてしまつた……。そんな風なことだつたと思います。そこで今日は、その續きから、つまりぼくとしてはいよいよ本題に入つて行くわけなのですが……。

ぼくはいつも、ぼくの精神が涸れてしまつたり、にごつてしまつたりした時、たとえば五線紙にむかつていて、不意にそれまでたえず頭の中になりのびいていた、これからかかれるべき未の音樂が、その美しいしらべをかなでるのをやめてしまつた時、あるいはたとえば、くらやみにすわつていて、急にそれまでたどつて來た思考の糸が、何か他のくだらない別の世界の糸ともつれあつてわからなくなつてしまつた時、そういう時は、かならずといつても良い位、ピアノにむかつて樂譜をひろげ、グルツクの「オルフォイス」を最初からひくことにしています。

古典音樂のエッセンスともいうべきこのオペラは、言つて見ればぼくのバイブル、希望、あるひは信仰です。ピアノにむかつて第一曲を彈き出す時から、この世のものならぬふしぎな空氣は、ぼくのまわりに滿ちはじめ、ぼくは次第に、過ぎ去つた神々の世界にひきこまれ、オルフオイスとオイリデイーチェ、むかしの戀の物語の主人公達は、その姿を現はします。そうして彼等が、彼等のものがたりを愛の讃歌のうちに演じをへるまでの數時間を、ぼくはまつたく彼等の世界に生き、彼等と共にかなしみ、おそれ、いかり、そしてよろこびあうのです。そのようにして、やがて彼等が、そして神々の時代が、次第に又遠ざかり、われにかへつたぼくは、ぼくの精神の泉がふたゝびこん〳〵と湧き出していることに氣づくのです。……（こんな風に書いてくると、貴女はわらふでせう。又、始まつた……その次にどういうか……私にはわかつてる……どうしてだかわかるか……それは天才の作品だからだ……そうでせう？　そうです。その通り、天才の作品なのです。

天才だけがその作品を通してつくり出すことの出來る一つの眞實な世界なのです。しかしまあ、そう言はせてしまつては、いつもと同じでそれつきりになつてしまう。今日はもう少し先を突つ込ませて下さい。いゝですか？）……

では、この「オルフオイス」のどこにそんなにひきつけられるのでせうか。それを少し考へて見たいのです。

ところでこの「オルフオイス」の最初の魅力は、まづそのストオリーにあることはもちろんです。——愛の力は何にもましてつよい。愛の力は神の心を溶かし、死の向うまでとどく——このどちらかといへば「わかり切つたはなし」である所のテーマが、古來どれだけ多くの、詩や小說や劇や音樂につくられてきたことでせう。……（このいちばん美しく、純粹で、素朴なテーマ。）……

しかもそれだけでは安心出來ないで、何度でもそれらを上演し、出版し、演奏することによつて「眞實の愛」の「幸福な結末」をたしかめようとする。善良な愛すべきわれわれ人間達。

しかしそれにもまして魅力のあるのは、このオペラに登場する主人公達の「堂々たる演戲」です。

一體、劇や、小說の例にもれず、オペラも近代になるにしたがつて、その登場人物達がちつぽけになつて來るようです。

たとへば、イタリアン・リアリズムのオペラといはれる、あの「カヴァレリア・ルスティカーナ」をごらんなさい。あの片田舍のやくざと馬車屋が、その町のうすぎたない女を、とつたとかとられたとかあげくのはてにおきまりの殺し場、悲嘆にくれる母親……あゝたまらない。內容の不潔さはもちろすですが、主人公達の戀のかけひきの、ちつぽけでこそ〳〵していることゝいつたら。

そこまで行かなくても良いでせう。

ワグナーのあのけんらんとした。スケールの雄大な舞台に現はれ

る人物達は、しかし何か、それ〴〵の宿命だの、前世の因緣だの、封權的な騎士道だのにしばられて、きうくつそうに見えます。そうして、彼等がいかに身を燒くような戀をしたとしても、結局は、その作品の根抵によこたはつている予言、運命の星、神々の約束などによつて、あらかじめ決められた結末へおひやられて行くのです。

しかし、オルフォイスやオイリディーチェをごらんなさい。彼等の戀のいかに堂々としているか、何と彼等の悲しみの壯大であることか。そうです。愛する妻を失なつた絶望の歌でさへもが、何と壯大な悲しみ、澄み切つた青空のように見事ななげきであることか。

だからこそ、神々までがこの愛の前に頭をさげ、オルフォイスは死の世界へまで、我者顔に出入するのです。ほとんど、ギリシャ悲劇の人物に近いものを思はせるこの主人公達に匹敵するほど「見事な振舞ひ」をみせる人物をオペラの世界に求めれば、女のためなら地獄へでも落ちて見せて凉しい顔をしているその道の達人ドン・ジュアン、それに、魔法の笛と天國の鐘で世を渡る鳥刺しパパゲーノ、まあこの二人位でせう。……（少し調子にのりすぎました。これはいはばオルフォイスの劇的、文學的解明です。いつもなら、この邊で、だけど、一寸まつて……と反論が來るところです。問題を「澄み切つた青空のように壯大な悲しみ」にもどしましよう。）……

ところで、今度は樂譜をひらいて見ましよう。まづ「シンフォニア」とあります。これは序曲です。が何と潑剌とした序曲でしよう。神々と人間とが同じように生き〳〵とくらしていた世界の調和とよろこび。しかし、おどろくべきは第一幕の最初の合唱です。こゝはオイリディーチェの墓の前、羊飼たちが花をさゝげてなきうたをうたい、オルフォイスはかたわらに悲しみのあまり、ことばもなく立つているという場面。この六十小節あまりの合唱の中で、オルフォイスはたつた三回、Euridice！と叫ぶだけです。が、この三回のよびかけに、後世の作曲家達が、何百、何十小節をついやしてなほ、表現しえなかつた「眞實の悲しみ」がうたいこめられているのは恐ろしいほどです。おそらく、人々はこゝで、まだ見ぬオイリディーチェが、この世で一ばん美しく、やさしく、眞實な女性であることを信じてうたがはないでしよう。そして、次のオルフォイスのアリア「神よ、オイリディーチェをわれにかへしたまへ」は、それらのすべての人々の想ひをこめてうたはれることでしよう。

……（一つ一つの曲についてこなんことを書いていたら夜があけるかもしれません。どれをえらんでも他より劣つているということはないのですから。で、ぼくの氣まぐれな選擇で以下のおはなしをすゝめて行かうと思います。）……

愛の女神のゆるしを得て地獄の入口へ來たオルフォイスは、たてごとをひきつゝうたう愛の歌で、魔物達のいかりを和らげてゆく。このすばらしい劇的効果、この世で一ばん美しいハープの音に耳をそむけて、ぼくらは冥界の幸福の園へ行きましよう。日光がさんさんとふりそゝぎ、そよ風に渡つて來るこゝでは、あの「妖精の踊り」とよばれるフルートの旋律をきくことが出來ます。それはこのオペラの最も美しい二つの部分の一つです。それはオルフォイスばかりか、ぼくらの心にも平和と安息をあたへます。そして限りない恩寵の世界に、オイリディーチェはじめて、その美しいくちびるをひらき、幸福の精靈達と共にうたいます。

……（冥界の王の許しをうけ、死の世界と人間界の境についた二人の間に、疑惑の影がしのび込む。そしていさかひがおこり、つい

にオルフォイスは約束をわすれて妻をふりかへつてしまう。オイリディーチェは息がたえる。）……

そうしてつひにアリア「われオイリディーチェを失ないぬ」（Che faro senza Euridice？）がうたはれるのです。これこそ古今にまれな愛の絶唱です。しかもおどろくべきは、このアリアが、透明なハ長調でかゝれているということです。ハ長調――それはすべての歡喜の絶頂に用いられる音階です――をあへて、この世にも悲痛な愛の歌に用いさせたものこそ、グルックの天才であり、オルフォイスの見事な戀、澄み切つた青空のように壯大な悲しみでなくてなんでしよう。この後で作者は、愛の女神をしてもう一度、オイリディーチェを生きかへらせ、よろこびの合唱のうちに幕をとぢていますがそのよろこびさへも、この、眞實のかなしみのあとには、何か平凡な小さいものに見えて來るような氣がします。

こうしてこのオペラは終るのですが、問題はこのあとにあります。このようなことを書いて來ると、貴女はこのオペラが、どんなに新らしい、この世のものでない、ふしぎなひびきをするのかと考へるかもしれません。

ところが、このオペラほどまた、簡素な樂器編成で、嚴格な、古典的作曲様式によつてつくられている作品はないのです。しかもその一つ一つの音さへも、不用意にかゝれたものがなく、後世の交響曲はおろか、ベートーヴェンの絃樂四重奏に匹敵する完璧さをもつて仕上げられていることは、たゞ驚嘆の外はありません。

ぼくはいひたいのです。これほどのはげしい感動につらぬかれた作品が同時に――推敲に推敲をかさねた作品のみがもち得る――最高の完璧性を持つているということが、そしてまれ、その悲しみやよろこびや、不安や恩寵のはげしい感動をつたへるのに、はつきりと「音」にすべてを託し、「音」にすべてを賭けている誠實さが、「オルフォイス」が比類のない名作であり、グルックがえらばれた眞の天才であることの、最大の理由であることを。そして同時にこのことはすべての「音樂」と「音樂家」についてもいへるということを。……

これだけのことをいいたいために、ぼくは貴女にこの長い手紙をかきました。しかし實はこれだけ書いても何もならない。あなたが「音樂」を理解し、純粹な「音樂的感動」を經驗するためには、音樂をきくほかありません。判り切つたはなしです。

しかし、まあこゝまで書いて來たものを、引つこめても仕方がないから、このまゝ貴女の手もとへとどけます。この手紙を機會に、貴女が音樂について、わけてもグルックについてもう一歩突込んだ研究をすゝめる氣になつたとしたら、その結果は貴女にとつて大きなプラスとなるでしよう。……

それとも、早速鋭い反論が來るかもしれませんね、貴女のことですから。その時にはまた、この手紙の中で觸れられなかつたいろいろの事についても、話し會いましよう。

もうそろ〴〵十二時近いようです。今日はこの位でやめましよう眠くなつたし、もうはだしで居ると寒い位です。「ヘッダ・ガーブレル」にはぜひ行きたいと思つてます。その時、お會ひ出來るでしよう。

では、おからだおだいじに。ごきげんよう。

九月　日

林　光

現代社會とクリスト教精神

國枝夏夫

一

「平和」は流行語ではない。現代社會に於て、世の人々は今、何者かに憑かれた樣に戰のき乍ら、空ろな顏つきで力なく「平和」を叫んで居る。戰爭の悲慘をあまりに强く味わされた彼等の心に燒きつく物は戰爭への限りない憎惡と恐怖である。しかも彼等の心底には既に絕望の影すらうかゞふことが出來るのである。二十世紀の社會で、人類は今正に破局の恐ろしい斷涯の淵に立ちつくして居る。足下には永劫の谷底が無氣味な口を開き、その奧には惡魔の微笑みすら見られる。この危機の正體は一體何であり、それはどこから來たものであろうか。現代のこの危機を最初に告げ知らす可き警鐘を打つたのは西歐の精神學者ではなく、實にクリスト教會であつたと云ふことは、未だ世の認識の埒外にある樣であるが、我々がこゝでその危機の原因を冷靜に考察して見るならば、これは明かになるであろう。その後に、我々が打たねばならぬ處置も、又、危機の正體をあばくことによつて明かになると思う。

二

中世の社會を支配したクリスト教は、歷史の頁が近世に入ると共に置き忘れられ樣とした。中世社會は「封建」と云ふ型に入れられ、政治の力が異常に强くなつて行くに從つて人々は壓迫を感じ、それを押しのけ樣とする力が起つた。ルネサンスの到來に於て、世は、政治權力を打破せんとしてクリスト教を捨て樣としたのである。クリスト教は政治ではない。それは封建社會にも民主社會にも光りを放つ人生の道標である。無謀にも教會の懷をとび出した近世の人々は何を求めたであろうか。一體、人間は本來、何ものかを信じなければならないものである。凡ゆる民族は史前はるかに信仰を有して居た。例外は全くなしに人類は何ものかを拜み、死者はねんごろに葬られて來た。信仰は哲學に先んずること幾千年か、人類の發生は信仰の發生であつたのである。そして歷史の變遷の中核は信仰の變動であり秩序の根底にも信仰がおかれるのである。それ故にこれをイデオロギーと云いかへてもさして誤りでないと思うが人類歷史は決して自然科學の研究分野ではないのである。さて、クリスト教にかわつて人々が求めた信仰の對稱は何であつたろう。それは科學である。世は科學を盲信し、物質文明はめざましい發展を遂げて、やむことを知らなかつた。有頂點になつた人々は、科學こそ、人類の幸福を解く鍵であると考へ科學の前にひざまずいたのである。だがしかし、世は今に至り、漸くにしてこれが誤りの道であつたことに氣ずいたのである。科學の神は冷こくであり殘忍であつた。彼は原子爆彈を人類の頭上に投下せしめた。そして科學のみに慰安を求めた人々は、恐ろしい彼の裏切にあつて啞然とした。

三

科學本來は善きものである。問題はこれが正しい使用法である。現代の危機の原因は科學萬能の信仰であつた。人間の根底に存するものは愛である。愛を忘れた科學程、味氣なく、そして怖ろしいものがあろうか。愛は決して漠然たる宙象ではない。クリスト教は愛の信仰である。それは全能の主が愛そのものなるが所以であるが新約聖書に於て聖パウロはいみじくも愛を定義した。—我たとい人間と天使との言葉を語るとも、愛なければ、鳴る鐘、響く鐃鈸の如くなりたるのみ、我たとい豫言する事を得て一切の奧義一切の學科を知り、又たとい山を移す程なる一切の信仰を有すとも、愛なければ何ものにも非ず。我たといわが財產を悉く分與へ又我身を燒かるゝ爲に付すとも愛なければいさゝかも我に益あることなし。愛は勘忍し情あり、愛は妬まず、自慢せず、たかぶらず、非禮をなさず、己の爲に謀らず、怒らず、惡を負はせず不義を喜ばずして眞實を喜び何事をも包み、何事をも信じ何事をも希望し何事をも怺ふるなり。——今存するものは信、望、愛の三つなれども就中最大いなるものは愛なり(コリント前十三)人は皆、常に愛し愛されることを欲する。古代ギリシヤより人々は眞實の愛を知らんとして苦悶した。が愛は難解なものではなかつた。クリスト教によつて人類は眞の愛を得たのである。

四

信仰と學問は各時代に對立を示した。多くの信仰は學問を怖れ、學問は常に信仰を輕蔑し無視して來た。クリスト教に於てのみこの二者の圓滿であつた。學問の發展は人類を幸福にする。が眞實の學問の根底には愛がある。幼子が母の言を、生徒が師の教へを全く卽座に信じ疑わないのは愛に依る。これは學問の出發點に愛のある證明である。科學者が根底をなす微小な公理や定理を一見して疑わぬのも愛があるからだと、聖公會の一牧師が述べて居た。愛はすべてを包む。が故に盲愛は害毒を生ずる。憎みは愛の反對である。愛がうばうものは惡であり憎みのうばうものは正

義である。誠に正義あるところに愛あり、愛あるところには正義以上のものが存するのである。コミュニストも愛に燃えて居る。しかし彼らの愛は盲愛であり、彼らの正義は可成ゆがめられて居るものであることは、彼等の行爲で示されてしまつた。

五

クリスト教會は二千年の間、世の荒波に雄々しく打克つて來た。現代社會の人々の多くは、風雨にさらされて、ひゞの入つたカトリック教會のドームの外形のみしか見ない。その內側にある無限に豐かなる信仰や藝術の、否、愛の遺產を見ることを知らない。殊に我國に於てはカトリックなる語は蚊取線香の存在程にしか留意されて居ない樣である。これが責任は科學の盲信者達にのみ歸することは出來ない。プロテスタントの一牧師が、正反對の世界觀のイデオロギーを奉ずる人々の群に同調せんとした事件を我々は決して一笑に附してはならない。それこそクリスト教徒の消極性に對する主の鞭でなくて何であろう。愛の寶玉は他に分け與へれば與へる程豐かになるものである事はクリスト者ならば誰も知つて居る筈である。ローマ教皇は聖年の今年、相次いで回勅を發せられてクリスト教徒を勵まして居られる。方向を誤まつて進む世界の全徒にあるものは破局である。これにブレーキをかけて正道に戻す力のあるものはクリスト教以外にあり得ない。神を忘れた人々は貪欲であり毫慢である。彼等は來る日も來る日も、己一人の快樂に狂奔し決して他の幸せを顧みようとしない。彼等にとつては學問すらが肉體快樂の對稱である。人爲的產兒調節の論が巷に公けにされるに及びこれは明かとなつた。怖ろしいことに、この破局を目前に控えて尙人々は自乘的態度をあらため樣としない。しかし乍ら世界四億のカトリック教徒は既に立ち上つて居る。ジョシストの運動を見るがよい。イタリー總選擧に於けるカトリック・アクシオンを見よ。眞の平和の鐘が教會の尖塔の上で今こそ打ち出され始めたのである。我等の求める平和—それは單に外面上の熱い戰爭のないと云ふ消極的平和ではない。聖靈による義と愛とに附隨した平和である。神の王國は又、平和の殿堂であり、これを建設することこそ我等戰鬪の教會(Ecclesia Militans)に屬する人々の使命である。ベルナノスは喝破して居る。「現代に於て嘆くべきは無神論者の多いことではなく、却つてクリスト教徒が充分にクリスト教を生き拔かないことである。」と。源をきよくする事なしに何の外的アクションがあろうか。そしてしかも混迷の社會を救う唯一の力を持つものは我々若きジェネレーションであることは云う迄もないのである。聖マテオの末章に於ける主の雄々しき命令を果す可き時は今である。汝等往きて萬民に教へよ。—誠に我等の惱みは深く、罪は重く、要するものは計り難い。されど主に對する我等の信賴は更に大いなるものなのである。(カトッリク榮誦會々員)

宗教の使命

安田　勝

人が神との交渉に入つた時。卽ち信仰に入つた時に人と神との間に宗教的關係が結ばれたという。この關係は或る價値あるものを求める人間本來の要求に依つて生ずるのである人は誰しもよりよき生活、遙かに優れた限りなき生命を願い求める。これは、永遠絕對なるものへの憧憬であるといえる。但し、我々は我々の住むこの物質界には永遠絕對なるものを求める事が出來ないという事を我々の知識で判斷出來るのである。この物質界に於てはすべてが無常である。我々は現實にぶつかつてこの我々の望みの果せない事に常に失望させられている。卽ちこの人間本來の望みはこの物質界に君臨する學問、道德、藝術(眞・善・美)の如き、此世的相對的價値には滿足せずにある絕對的價値を求めるべき願いであるという事を知るのである。そこで我々は、その現實を超えた絕對的價値卽ち「聖なるもの」ともいうべきものに向つて進むのであるが、但し途中屢々挫折させられるのである。そして此世的瞬間的物質的な金力・權力の誤つた方向に進まざるを得なくなる。それは日々の衣食住から遊興歡樂の欲望に至るまでのすべてが夫々の力を以つて我々を誘惑するのである。そこに我々は人が信仰を持つて神との交渉に入り遠永絕對なるものを得ようとする時、强力に邪魔する所謂惡魔の力を發見するのである。そこで我々は、限りなき永遠絕對なる生命を得るにはどうしてもこの物質界を超えなければならない事を知るのである。では如何にしてこの現實の世界を超えて行く事が出來るか。

我々は、自分が死を前にしている時、人生の不可解を悟つた時、或いは自分の最愛の子供或いは愛人が死んだ時、かゝる時にある矛盾惑(Something wrong)を心のどこかに感じる。他の人達は生きている。然るに自分はどうして死ぬのだろう。自分は死ぬべきではないのに……

それが如何に科學的論理的に說明されてもその何かある矛盾惑は除去出來ないのである。結核菌が空氣を傳染し肺に入り何ケ月のうちにどの位の繁殖率で增えて……等と如何に詳しく判つていても駄目である。何となれば、この時にはもはや現實を超えて此世の理窟の通らないある世界に

我々は入つているのである。かゝる時に、かゝる人を此世的に言えば弱き人という。この弱き人は此の世のすべての最高精密な人には絶對に滿足出來ない something wrong な心を持つている。そこにある絶對永遠なもの卽ち神への憧憬が燃え現實を超えてひたすらに信ずる事が出來、始めて宗教の價値があり必要性が生ずるのである。然つて、宗教とか信仰とかは絶對に科學的合理的ではない。それはこの物質思を越えた形而上界に位するのである。我々は知以上に知を超越した所に情（靈）の世界のあるを知らねばならない。この境に生きてこそ眞に信仰、永遠なる生命を得る事が出來る。こに於ては、神或いは奇績の存在如何は問題ではない。神は我々の此世的で有限な理知を超えた純粹存在である。故に信仰あるのみである。又信ずる事、そのものに永遠、絶對なる價値があり、無限な生命を享樂出來るのである。

但し二〇世紀の人間は「事實と數學及び感知できるデーターの他は何も信ずる事が出來ない」様な人間になつている。そして彼等の生活態度は現實主義的でその認識は極端に唯物論的傾向に倒れている。然して目に見えぬ神を信じたり、永遠不變な、絶對的、先驗的な宗教を、問題にしない。つまり、全く非宗教的になつてしまつている。その結果、人間も物質以上に見る事が出來ずに、人類の悲劇はあらゆる時と所で繰り廣げられ、戰爭は絶えない。彼等は全く物質にリードされて戰爭を行つている。

然もこの傾向は增々進み、正に、この地球は爆發の寸前にある。それらは歷史の正しい道とは言えない。歷史は必ず進步しなければならない。そこで我々は歷史を正しい道に戻さなければならない。それには先ず、先のある矛盾感を夫々の心の中に發見しなければならない。現在の我々は必ず心の何處かにある。そして我々は物質のみの世界から拔け出し、物質の奴隷化され變型された人間を物質から解放しなければならない。卽ち宗教心を再び我々の心に引き入れなければならないのである。そこに、二十世紀に於ける宗教の使命があるのである。

（Y・M・C・A會員）

（五三頁よりつづく）　の追憶を聞かされて過去の偉大な西歐の魂達の世界を發見した。マルヴィーダとロランの友愛の中に私はドイツ的世界とフランス的世界との一つの邂逅を見出す。ジャン・クリストフ」の作家ロランは各國民によつて宿命的に考へられている獨佛兩國間の宿緣的反目を內面的に超克しようとした。二人の邂逅はその意味に於て極めて意義の深い瞬間であつた。青年時代彼女から受けた「愛と平和」の光はロランの心から永遠に消えさることがなかつたのである。彼女への頌歌ともいうべきこの章は、人間的友愛感に溢れるロランの精神的自敍傳の最後を飾るに最もふさはしきものというべきであろう。一九五〇・九・三〇

（筆者は英語會々員）

ニーチエ研究序章

――生と道德――

茅野良男

カント以後の哲學史を、カント哲學の盛衰興亡の歷史として把へる事が或る意味で可能であるやうに、ヘーゲル以後の哲學史も同樣ヘーゲル以後の哲學の興亡と見做し得るであらう。然しながら各々の時代は各々のカントを讀みヘーゲルを讀む。とすればカント乃至ヘーゲル哲學自體は、イデー的な、追求の目標に過ぎないのであり我々に刺戟を與へ興味を喪らせるそのものでしかないのであるか。ニーチエに比較的多くの嚴密性を持つと考へられる彼等の體系に對してすら、その歷史的評價は屢々不一致を示し、體系的解釋は往々相反する結果を生む。況やニーチエの本質如何に就てはその確定が甚だ困難であると云はざるを得ない。ニーチエ自體の意味は一體何であるか。生の哲學者。實存主義の先驅。近代の批判及びその超克者。ニヒリズムの克服。或る時はミリタリストに、或る時はアンティ基督に、或る人は科學性なき概念詩として非難しその多種多彩なアフオリズムは狂亂の徵候を漂はせる。卽ち一方では精神病理學の一範例とされ、他方ではそのデイオニユンス的な生の豐富さが高く評價される。ニーチエに向ふ人々は、その興味と關心とに從つてニーチエの像を明確にしつゝ同時に又複雜化した。事實ニーチエ自身、星を盈む混沌そのものであつたのである。だが彼處ニーチエにあつては、追求と探究の灼熱せる經過であつたものが、此處ニーチエ研究者にとつては思想的意味成體として受取られる。全く逆に、ニーチエに於て人格的に融合し綜合せられた諸契機が、此處では機械的に抽出せられ、分解されつゝ明確な概念像へと形成せられる。彼等は一面性の代償を支拂つて、ニーチエの全體像を果して保持し得たと云うのであるか。それではニーチエ研究書の凡てが指示するであろうニーチエ自身の精神的錯亂が、そのまゝニーチエの本質としての錯亂に置換へられる危險が生ずる。勿論偉大な古典には種々の解釋を容れ得る餘地があるのであり、この事は決して古典の價値を輕減する所以ではない。然しその故に單なる觀點設定の輕妙さと

その持つ一面性とが、古典の持つ全體的統一を制限し收縮もしめる危險があると云はねばならぬ。從つてニーチェ研究の爲には、ニーチェ研究書の繙讀は勿論の事、最も肝要な事にニーチェ自身の著作遺稿、書翰等の透徹せる理解なのである。理解は知識的であるばかりでなく、更に興味關心を超えて、對象に肉迫し對象を所有せんとする愛に基くものでなければならぬ。固より人間は時間內存在であり、永遠なる愛はイデー的にのみ構想され得るのであり、人一人愛し理解する事の如何に困難であるかは、體驗の常に我々に證示する所である。然し人間に本質としての時間性と有限性とを持つにも拘らず時間を超え、人間を超えた存在にも、それ自身有限的分散的な仕方で關與する事が出來る。此處に恐らく人間存在の意味が存するのであり、我々がニーチェを取扱はうとするのも、一八四四年十月十五日に生れ、一九〇〇年八月廿五日に沒したニーチェ個人を超えて、人間精神史上の文化財としてのニーチェの思想の意味特に洋を異にし時を隔てた我々に對して持つ意味を把握しようとするに外ならない。序論の爲の覺書とも云うべき此の小稿に於ては、ニーチェ自身の著作、ニーチェ研究者の多樣なる文獻、の双方に渡る綿密な論究を施す豫猶を持たぬ。唯在りしがまゝのニーチェに觸れると云ふ課題の下に、ニーチェの思想を「生と道德」なる副題で通觀しよう。此の副題の選擇は、筆者の現在抱く思想內に於て爲されたものであり、庶幾する處はニーチェの全貌を象徵的に把握し得る如く且ニーチェを包括し得る精神史的潮流にも副ひ得る如き視點の設定なのであつた。

ニーチェを生の哲學者として把握する事は、今日既に哲學史的常識であるかも知れない。普通生の哲學の代表として取扱はれるディルタイやジンメルは、各々その著作の中でニーチェをショペンハウエル等と共に生哲學の先驅者として取扱うのみならず、生の哲學に鋭く對立する學的哲學の一方の代表者リッケルトすら、此の點のみに注目する限り、彼等と意見を同じくしてゐる。殊にジンメルの如き、ニーチェとショペンハウエルとに就いて獨立せる好論文を持つのであるが、彼のニーチェ觀を例へばヤスペルスのそれと比較したり、其處から逆にニーチェが所謂生の哲學內で持つ意味を確定せんとするのではない。ニーチェは如何なる權利を以て生の哲學者と呼ばれるのであるか、更に其の立場で道德とは如何に考へられているか。これは構想せらるべき生の哲學史の一環としてのみ注視さるべきである。

さて我々の構想する生の哲學は、文化哲學と實存哲學とに、夫々の根柢と基盤とを提供せんとするものである。生とは、一層具體的には、個々人の生涯であり、生活であり、更に廣く人生と呼ばれるものを包括する。生は、動植物的な自然的生命を不可缺の母胎とするが、單にその段階に止らず、人間に於て始めて精神的生としてその全相を示すに到る。生は有形無形の成果的文化の根源であり、更に創造點としての個別的實存を生かす母胎なのである。諸々の文化財は遺產として我々人間を取卷き、我々は生れながらにしてそれ等の唯中に放り出されてゐる。更に人間に常にその現實存在が己の本質を決定する點で、正しく實存なのであるが、これは生を無視し乃至それを否定しては存在し得ない。人間が成果的文化に於て普遍性を實現してゐるのであるならば、實存に於ては個別性が躍動していると云はねばならない。文化はその產出者として、個別的實存の個性的實踐を豫想している。人間は個別性の最尖端に於て生動的に文化的創造を實現しつゝある。精神・心情・身體の統一體としての人間を、創造と實踐と實現の主體としての實體を、可能ならしめているものは正しく生なのである。生は個別的實存に收縮し濃厚化しつゝ、又普遍的文化へと有形化し稀薄化して行く。生はかくして文化と實存との双極を持つものであり、文化的成果と實現的創造とを結びつける紐帶なのである。

生は自己の周邊に、生自身の創造せる文化を持ち、かゝる生の客觀態との相互限定に於て生動性を保持し行くのである。然し一度外的感性的に固定せられた生は、反つて己を產出した能動的生自身を壓迫し壓倒せんとする。生は自己の產物から限定せられ規定せられる。生はかゝる受動的態度を本質的に所有する反面、客觀化された生に對し、再び自己の自由を保持し、より生動的、より昂揚的たらんとする。生に於ける受動性と能動性との相互交替、相互浸蝕、或は一方の他方に對する優越、それ等は相互に浸透しつゝ生の悲劇的本質を形成してゐる。生はジンメル的に、Mehr Leben たらんと欲しつゝ、Mehr-als-Leben と常に接觸を保たねばならぬ。それではニーチェに於て、個別的生と普遍的生、過程的流動と成果的存在とは、Mehr-Leben と Mehr-als-Leben とは、如何なる具體的な樣相を示すのであるか。

ニーチェの作業の頂點を「一切價値の價値轉換」に求めるならばそれは正しく新しい價値評價の完成であり、從つて新しい道德の確立と見做し得るであろう。道德とは廣義の文化—人間的生の形成物としての—に包含されるが故に、ニーチェの說く道德は彼の文化哲學を指示すると考へられる。ニーチェが「近代性」の批判者でありその超克者であると目される所以も、實はニーチェの文化哲學が道德哲學としての意味を持つ點に於て云はれるのである。ニーチェは單なる價値表の制作者たるのみでなく、自ら舊來の道德を無みするものであり、一個の新しき道德の健設者であつた。ニーチェ的實存は、自ら客觀的成果的文化としての道德を產み出す正に其の基體であつたのである。實際ニーチェがその生涯を通じて味はひ、そして嘗めねばならなかつたのは、創造者の苦痛であり、創始者の嘆きであり、自ら創造する者が常に體驗する孤獨の氷原であつた。創造的實踐に於ては、實存的個別性は文化的普遍性を實現化し、後者は前者に於て現實化する。ニーチェ的生は、Mehr-als-Leben を自ら創造するMehr-Leben なのである。從つて「一切價値の價値轉換」により表現せられる道德は、實存を制限し束縛し支配する生の形式ではない。それは遺產としての舊來の道德を破壞する道德なのであり、更に端的に云へば經過としての、流動としての生そのものに基づく道德なのである。健康なそして强力な生そのものが道德の根源であり價値評價の母胎なのである。「道德とは人間の順位に關する教說」[1]であり、「順位とは評價の最初の結果」[2]であり、「〃生動的〃であること、とは既に〃評價している〃」[3]ことなのであつたから。從つてジムメルの鋭く指摘する如き、流動的生と成果的生と成果的生との間の矛盾葛藤、生の悲劇、は、ニーチェから一見遠いものである。彼處冷嚴な觀察者にとつては悲劇でしかないものが、此處灼熱せる生の奔騰に於ては、明白に「ヘロイスムス」の意義を以て語られている。まことニーチェにあつて、その全哲學は生からする哲學なのであり、生動性に滿ち溢れた生のなす創作なのであつた。だがニーチェは最早我々ではない。何故ならニーチェ自身己の特殊的前提を常に意識していたではなかつたろうか。ある特定の生の、ある定ま

つた肯走が、凡ゆる評價の前提なのである」[4]とすれば。然しニーチェは、その特定の生を、生一般に置換へていたのではないか。ニーチェは既存の道德を以て、生の伸長を阻害するとした。この主張は生の維持と豐富化とを道德の根源とする、ある道德の積極的主張を豫想する。このある道德が究極的であると云われる爲には少くとも少からぬ「權力感情」[5]を必要とするであらうから。從つてニーチェは、既存道德の非難と破壞とを、新しく建設せらるべき道德の見地から行つてゐると云はざるを得ない。唯この來るべき道德が、生中心に見らるべきであると云ふニーチェの意圖は、道德から生を、でなく、生から道德を新しく見直す、と云ふことなのであり、Mehr-als-Leben に對する Mehr-Leben の優越を要求したものと云へよう。

だが其の瞬間、ニーチェのかゝる意圖は、既にある種の道德としてその存在を現はす。生が價値評價の支點となる時、生が道德の根源となる時、生は正しくかゝる生として、道德は正にかゝる道德として我々に映像する。既ち生は生一般でなく、道德は道德一般ではない。ニーチェ自身ヘロイスムス的に主張した道德は、それ自身ある種の類型に屬するものとして我々からは理解せられる。一つの絶對的な意味を要求する主張乃至意圖が、實現せられ遂行せられた瞬間、實は相對的意味を持つ存立に過ぎない事、これは生の本質に屬する時間性の到す所以である。ニーチェが「十字架にかけられる者對デュオニユソス」を叫ぶ時、かゝる例外者的意識は、ニーチェのみの占有する所ではない。基督敎的世界に對して、古典ギリシアの精神を提示し、これを以て前者を救濟せんとするニーチェの根本的意圖は、西歐精神史の潮流内に於て、必ずしも唯一のものとは思はれない。ニーチェが結局は西歐文化内での極めてユニークな存在であり、かゝるものとして、我々自身を取卷く諸々の成果的文化の一つとして理解さるべきであらう。ニーチェが分析し探究し抵抗した潮流は、必ずしも我々を取卷き培つたそれではないのであり、かゝる斷絶を意議しつゝ、猶且我々は、生を道德の根源とする道德哲學者としてのニーチェを取上げようとしたのであり、我々から見るならばニーチェとはかゝる Mehr-als-Leben の主張者であると批評し得る。然し生が道德—生の形式として既に Mehr-als-Leben なのであるが—の根源たるべしと云ふ、一見 Mehr-Leben の主張者ニーチェは、その主張そのものゝ Mehr-als-Leben 性を是認せねばならぬ。

ニーチェをジムメル的に解釋して得られる此の結果は、哲學史的に見るならば生哲學の、ニーチェよりジムメルへの深化發展と見做され、體系的に見るならば、生がその外皮的部分から生の内實そのものへと自覺を昂めるに到つた經過そのものゝ實證と云へよう。更に視點を變へるならば、ジムメル的な生の悲劇と云ふ事實は、ニーチェに於ても完全に見出し得るのであり、その限り變化し流動する生の流れを一貫する、云はゞ自己同一的な生の形式の確認がなされたのであり、生哲學の底に潛む同一哲學がそこから看取されると云へるであらう。このように、流動生成を旨とする生が、云はゞ生ならざるものに觸れていると云ふ事は、ジムメル的な Mehr-Leben と Mehr-als-Leben との交織乃至轉換によつて生を說明する生哲學に更に新しき分野を開拓するかの如くである。生は時間的であり、その生み出した諸文化は微視的には超時間的な意味的存立である互視的には矢張り人間歷史中の一環として時間の洗禮と審判とを蒙らねばならない。だがこの双方の接觸乃至摩擦を通じて、生が常

に生であることは、生の持つ無時間的な力乃至形式を豫想するに到る。生は時間的であり、しかも生自身常に自己同一的に時間を消す力を持つ。生は結局は時間的である形式を外部に伴ひつゝ、無時間的なる形式をもその内部に於て持つ。生はその外と内とに於て生を超える形式を持ち、それ等との接觸に於て生なのである。

さて結尾を持つべき時が來た。ニーチェは單なる破壞的ニヒリストではなく、能動的な存在の建設者なのであつた。若し道德とは存在の建設であると云つてよいのであるならば。從つて、生と道德との關係の指摘、更に生に基く道德の建設、これがニーチェの作業なのであり、彼をプラグマティズムやヴアイタリズムに算入する以前に、理想主義者としてのニーチェが全姿を示すべきである。唯既存文明や道德に對する批判が、或種の—生と云う—立場から愛されてゐる爲の制限は、見逃されてはならぬであらう。

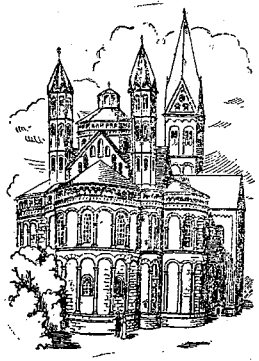
認識に生が奉仕すべきでなく、生に認識が奉仕すべきである。然し文化は人間的生から生れて、それ自身獨立的な意味を持ち、人間を壓迫し、時には人間を支配する。諸々のイズムは、往々人間を單なる手段としてのみ取扱ふ。人間的生を保全し發展せしめるべき文化の或部分は、逆に人間に禍をもたらし得る。人間的生の成果から人間が支配されると云ふこのやうな現代文化の悲劇性から、人間が獨立し自由になる事、ニーチェ的なるものは此の意味に於て現代的意義を持つと云ふべきであらう。但しニーチェ的なヘロイズムと、例外者的な意識とが避けらるべき事は、又恐らく疑ひを容れぬ事であろう。

註 (1) ニーチェ全集(ナウマン版)第十三卷、百十四頁。 (2) 全上、百七十二頁。 (3) 全上、同頁。 (4) 全上、百三十九頁。 (5) 全上、九十八頁。

(筆者 東京大學哲學研究室助手)

この論文は本來ならばこの三倍あまりの長さのものであつたが紙面の都合で後半三分の二をひどく縮めていたゞいた。

編集委員



晩夏

關恒久

古い城のある町であつた。日中に柿澁の匂をさせてゐる黑く長い塀と、ドロンと綠茶の樣な秋の水をとゞめてゐる堀のある町であつた。

氣の拔けた樣な白い日の光と、恐しく黑い影を作つて日は眞晝であつた。その陽は、藤川家の奥座敷にも落ちて、たゞ五寸程、深くつやのある廊下を照してゐた。その代り廣い座敷の隅々迄、妙にはつきり明るくて大きなふすまが靑く光つてゐた。

うす暗くて——そして明るい光の中に、冷く粉をふいた黑い葡萄を間に狹んで二人の女が座つてゐた。二人は丸いうちわを膝の上に置いて居たが、もうこの葡萄の上に秋はひそんで居た。

二人の女はこの眞晝に一點に交つた。それ迄二つの曲線は平行して遠くからすべつて來た。これから又、平行して行くかも知れぬ。一方が消えるかも知れぬ。これまでの山なす日々の遺骸の中に二人の女はもつれあつた。敵であつた。

水分の少い樣な透明な、だから冷たく感じられる日の光は、前の芝生で黃味を加へられて部屋に反射してゐた。

千代と孝子——この五十過ぎの二人の女の名であつた。反射の光が黃をふくめてゐるので、その二人の姿はどろんとした樣な、どこか華かさを含んだ樣な光の中に居た。千代は白い髮と額に立てじわの寄つた細面に、しわのいやに

目立つ麻の着物を着て、撫で肩も細かつた。その向うに對して孝子は丸い一つ一つのしつかりした小柄の體が溫かい上品さを持つてゐた。

絲の少し水氣の無くなつた樣な芝生の中に苔の付いた鉢に植ゑて、ゼラニュームの花が一つ。何回目か、散つては付けた花をつけて居た。それは、花の無い廣い庭に一つ捨てた布切れの樣に、光を吸收している樣な深い紅だつた。見るともなく花を目に入れてゐた千代がポツンと言つた。

「何時死ぬかわからないんですもの。ふとんの手入れも何もしませんの。着物だつて、いくらいゝものでも、今の若い人は餘り喜ばないと思つて、皆着ちまおうと思うんです。つまりませんもの。人間なんて。」

相變ず、縱にしわを寄せてうつむかずに、こう言つた千代の顏に、孝子はかへつてその眞直な目に、この言葉の淋しさを、この女の淋しを强く感じたが、溫い體はハヽヽと笑つて、

「誰だつて、そりや運ですもの。その時は、御先祖樣のおめしなんですよ。その時迄は誰でも働きたいと思うんですの。私、菜園もやつてますのよ。野菜が生きているのが樂しいんですよ。」

實際彼女の手は丸く茶色く軟かゝつた。ハヽヽと笑つて見せた孝子は實際には、無精な淋しさも感じてゐた。その淋しさは遠く迄さかのぼつた。それは恐しくもあつた。丁度、時雨が來る夜に、大黑柱に昔ついた古い血がジーンとにじんで來る樣な——

いつか、これと同じ言葉を孝子は千代の母から聞いて居た。蟋蟀が鳴いてゐた。母親は妾だつた。

「かたさせぬのさせとて蟋蟀が鳴いてるよ。でもつまらないね。いつポツクリいくかわからない身だもの。」

千代は藤川の富から生れた子だつた。千代の父淸太郎は、上から流れて來た多くの金と廣い土地の頂點に座つてやはり樂しい命を送つた。澤山の妾を持ち、それ〴〵の宅をたてゝやり死んだ。淸太郎の本妻は彼に先立ち二人の男の子——梅太郎と次郎を殘して世を去つていた。本妻の後に入つたのは、千代の母万であつた。万は仲々頭のきく女だつた。どつしりとして、重たい藤川の財產を意のまゝに動かす女だつた。

千代は万の頭の中に動いて腹ちがいの兄の梅太郎とめ合はされた。そして淸太郎は死んだ。後に藤川家の富は万の細い指先に動いた。

本妻の子、次郎は年頃になると、孝子をもらつて分家させられた。財產も分れたが名目だけで、實際は兄の梅太郎

の物だつた。兄のはからいで養蠶の合資會社を作つたのである。

次郎の家は黒い格子のはまつた下たやだつた。何か布團の匂のする家であつた。孝子のたんせの匂いかも知れなかつた。彼女は次郎との間に生まれた一人の女の子を年の冬ごとに綿入れをうらがへして縫い、枕元において年を越しながら育て上げた。子は父の次郎が東京に買物にいく――その夜の彼の歸りを樂しんで大きくなつた。「旦那様。御歸り。」と車夫の聲がして乾いた音を立てゝ、くゞりの戸が開くと大きな土産のつゝみが車夫の手にあつた。女の子の土産はとき色のリボンだつた。それはスイトピーの様に可憐で、そして忘れられても樂しい色だつた。

万は自分の頭通りに動く總てを充分たのしんで改名に變て佛壇に並んだ。

梅太郎はやはり東京に遊びの家を作つてそこに通つた。千代はその運命的な富のいたづらを左程に思わず一人の男の子と二人の女の子を毎日撫でてつやを出す様にして育てた。梅太郎から流れ出るつきぬ金に梅太郎に向う愛への無反能は何とも思わなくなつた。その代り子供に女の本能をつくしていた。子供はそれをすつて伸びていつた。

……顔まで青くそまる様な若葉の日に一番上の男の子は空氣銃をうつてゐた。舶來のものである。水氣の多い晩春の空氣はその音をねばりつかす様に木魂した。町の寢い空氣はふるへた。――毎年かつこうが來た。斧の音の様な聲で鳴いた。しかし年々その聲は少くなつた。男の子は堀邊の森をうつて歩いた。そして男の子は年々背が伸びたが、かつこうは思い出した様に向うの方で鳴いた。――

……夏の行く宵に、芝庭に線香花火が散れた。つんとした花火の匂いと浴衣の糊の感覺が行つてしまう夏への淡い感傷をさそつてゐた。早くも夜露のおりる様になつた芝の上に、まぶしい花火の火は消えたが、そのはかない光の中に二人の娘の指に大きなダイヤの指環が深く、奥深く光をとほした。それも又輝いて宵にとけた。――

孝子は夏の最中に本家に暑中見舞にいつた。玄關につゞいた茶の間に梅太郎は鼻かげのよく似う顔を餘り笑わせなかつた。上下の位置は決つていた。千代との間もそうだつた。何一つ千代は孝子にくれた時は無い。たゞ二人が子供の話を夫々する時だけ二人は別の世界で對した。二人とも樂しかつた。孝子は左程この區別のあるつき合を苦にしなかつたが堅實な彼女は藤川家の峠の早めている事を知つていた。彼女はおとなしい主人、次郎にそれを考へさせ合資をやめる事をすゝめた。運命でもやはりいゝ事でないあの樂しみのために自家の財産も共だをれになる事は恐しかつた。

果して藤川家の峠は早も達し下り坂は先に細くつゞいて見えた。一人息子は親ゆづりの放蕩の果てにポツンと若い命をたつた。一時はこの子は死んだ方が幸せだと思う位の遊び方であつた。續いて大きな不幸が來た。父の梅太郎が東京の家から白い箱に入つて來た。先祖の墓の石碑の上に鳥が止つて鳴いたという――その日だつた。千代は青疊の廣い部屋の寒さを感じた。ボーと空洞を過ぎる風の音が何處かでしてゐる様な氣がした。それは命の罐の空しいからの響きだつた。こちらでうつてもボロ〳〵にくづれる虫くつた日々の到來だつた。

しかし年日はさゝやかな自分のたわむれだけは忘れないでくれた。二人の娘の育つた果てに派手なすそ模様を引いて町から嫁いで行つた。一人は醫師に、一人は製紙工場の主に――。

千代は何かもの足りない感じにとらわれた。廣い邸にすきま風のふき込んでくる氣であつた。こゝまで生きて來た。何か滿足した様なそれで不滿な――やはり今は何か空虛だつた。二人の女の子が生まれた時、ならわしの桐の木をうえたのが、今は大きくなつて庭隅に空しく澁い花をポトリと落した。

も早、孝子の家に財産をわけて後、よした養蠶場は子供の爲になくなつていた。子供の爲に――子供を海水浴につれていく爲だつた――海は青く光つてゐた。二人の娘の水着は赤かつた。

次郎は自分の手に財産のかへつた幸福な滿された老年期に入つていた。子も大きくなつて養子をむかへて新宅をかまへた。そして初孫が生まれた。孝子はそれをおぶつてほいほいあやした。次郎も外に出ればビスケツとの袋を忘れずに買つて來た。次郎は初孫のはうそばで、自分の指先のさゝくれにまつわる綿入れをたゝんでいた。二人ともだまつて居たが、二人の命がこゝまでふくらんだのを樂しんでいる様な沈默であつた。

千代は二人の娘の遠くなつていく便りをまつて年老いた。どちらかに外孫が出來れば一人引とつて育てようと不圖思う事もあつた。しかし嫁いだ先を訪れた時の千代はいつも滿されぬのけものの氣持で歸つて來た。ぬらりと逃げられた氣持である。香のぬけた氣持である。

毎年邸の前の通りを春先きに埃の匂をさせて大師參りの田舍の老寄の御詠歌が通りすぎた。をそい秋に赤く淡い提灯を霧に曇らせて祭りが來た。一人でいると細く耳元でまつわる様に笛が聞えた。――それらは空耳かと思う様にわつと來てうその様に消えた。そしてそれを毎年同じリズムを持つてくり返して月日は千代をおいてきぼりにした。千代は白髪がふえた。

千代はこの頃時々庭の芝生にボーとかゝつてゐるもやの様な――日の光を見る事がある。夏の夜、不圖茶の間にくるかげろうの様にどちらが影とも知れない様なものだつた。それを見ると千代はいつか見た様な或は見ない様な一つのものを目に浮べた。――黒い町並であつた。いやにひさしが深かつた。何か匂がしていた。或は線香のにほいだつたかも知れない……今日は昨日になる。總て過去に入り込まれていく。そしていつかその種も無くなるであらう。今日を昨日にするかわりに何かを支拂つているのだ。それを考へるとゾーとするのだつた。梅太郎の改名のわきに朱で書かれた改名――石碑の冷たさを千代はそのゾツとする寒氣の様に思つた。――万に遠い日にいつか連れていつてもらつた墓地――何故かさるすべりが万開であつた。無縁塔に黒い影畫の様に石佛が乗つていた。日は眞上でその爲木もれ日が小さくそのかわり恐しく明るく、動かなかつた――。

日の光は黄を含めてやはり氣が拔けた様だつた。夕方の風はも早秋で、えん先の葡萄の葉をカサリと落した。

孝子はいとまを告げて玄關に出た。玄關のかた隅で晝の蚊が一つ、煙が地をはう様に弱くうなつてゐた。千代は庭木駄をつかけて玄關先の庭石にかゝつた白い萩の枝をおこしてくれた。萩は満開で白いかわりに寂しく細かつた。

――一九五〇、九、二〇――

絲瓜の日

森　直　也

「此處いら邊も隨分變つたものだ。」

豐子は疊の上に頬杖をつき團扇で蠅を追い乍ら思はず呟やいた。颱風が近づいて妙に蒸々とする午後であつた。桐の木に油蟬が暑さを煽つているのだが、この存在が最前からひどく彼女の神經を昂らせ、そのどうにもならぬ痛憤が次第に境遇への不滿と推移して來たのだつた。

豐子は高等下宿の女主人である。近頃の多くの下宿屋の暴利と冷酷を彼女は盛んに人に逢う毎に鳴らし、自分はそんなあこぎなまねはし度くないなどと叩く口の下で、學生の配給の炭や薪を縁の下に運び入れる位の事は平氣でやり、心にとどめない年令を持つていた。彼女は六十年をこの世の空氣に接して來た。その生來の勝氣は寧ろ異常なものがあり、近所界隈の憎まれざる顔役となつていた。事實、電柱の故障で停電した時や、食糧配給所での彼女の登場は多く期待もされ、そして効果的であつた。關東配電や配給所の若い男達が畏怖する彼女に、近隣の人々はマツカーサーと仇名を呈した。豐子はそうした周圍の風潮を知つてか、知らないでか、相も變らず干渉の多い生活を送つていた。

「此處いら邊も隨分變つたものだ。」

という彼女の追憶には山の手の靜寂な雰圍氣がこもつていた。子爵や、犬を連れた外交官夫人の端姿、そしてその令

孃から小母様と呼ばれ、高い見識でその世界に生活のあつた自分の現在は、ある見方からすれば余りにもみじめであつた。

「仕方がないのさ。」

豐子は太々しく、へちま棚の見事なぶら下りを團扇をかざして要の細竹越に目を細めて見入るのだつた。實際、そんな過去の夢に關りあつてはいられなかつた。犇々と現實は、只空虚と屈托が好戰的な例えば電球を思いきり叩き割りたい溜飲となつて沈積して來るのだつた。

「こんちわ」

玄關に訪う聲がした。豐子がむくりと起上つて出て行くと、其處に軍隊服と赤皮軍靴をつけた青年が品の無い笑を含んでリュックを肩から下していた。

「お婆さん、おばさんかい、何か買つて呉れないか」

「生憎皆間に合つてるよ」

彼女は青年の最初の一言で激怒を誘發された。彼は全然返答を無視した態度で落付き拂つていた。

「ゴムヒモにしようや、安くしとくよ。」

包みが開くと中からゴムヒモだの石ケンだのこま〳〵したものが雜然と顏を出した。

「いけないよ、そんな所に擴げちや。押賣だねあんたは。」

戰端と開いた彼女の姿は威風堂々とすさまじかつた。が、この様な敵に對しては二階から目藥をさそうとする努力の如く効果がない。

「いや押賣はしねえよ、買はないんなら買はなくても良いさ。ぢやあ、此處で辨當喰はして貰うよ。」

明らかに青年のいやがらせであつた。彼女は一寸ひるんだ。何がしかの金をやつて歸そうかと思つたがいかにも屈服は我慢出來なかつた。

「辨當なんて、何處か、そこいらの草の原で食べたらいゝだろう。買はないものは買はないよ。」

せい一杯の反攻だつた。青年はふんと笑つて、

「どうしてもいやかね。」

と故意に家の中をじろ〳〵と見廻した。流石に豐子も勝負これ迄であつた。敵對し得ない强力な敵に壓倒されて、之以上の反攻は危險だと感じた。そうなると逆に恐怖がずんと湧き、忽ち體溫が低下する思いだつた。その無條件の敗北のみじめさの中にふと腦裡に浮いたのは下宿している警官の武田であつた。豐子は日ごろのいきさつは忘れて突差に大聲を上げていた。

「武田さん、早く降りておいで。」

青年は新なる相手に警戒する様に眼を光らせた。

「何だね、あゝ押賣か。」

武田といはれる青年は彼女の二階に下宿している下廻りの巡査であつた。玄關に立つた姿は着流しではあつたがやはり貫祿があつた。

「何だ、おめえは。」

「俺か、俺はお前の隣りの者だよ。」

青年の住んでいる勞務者更生寮の隣りは　警察署であつた。ポプラの木の一本立つた殺風景な中庭と、青つぽいペンキのはげた窓がちらと青年の頭を掠めた。

「俺達が商賣して惡いか。」

先刻の様にゆとりのある聲ではなかつた。相手に搦みつく様な調子だつた。

「つべこべ云うなよ。名前、なんていうんだ。」

鮮かな止めであつた。

「覺えていろよ。」

彼はゆつくりとリュックをかつぐと複雜な表情で振り返り、それから煙草に火をつけて悠然と出て行つた。それは非常に幼稚に見えた。寧ろこつけいにせつない感じであつた。豐子は、はりつめた息を吐き出した。と同時にその息は言葉となつた。

「大丈夫かね。」

「大丈夫ですよ。」

ぽきりと指をならして武田が云つた。
「さうかね、あんたが居てくれて助かつたよ。」
今の豐子には本當に彼が賴母しく見えた。
武田は×署の巡査として勤務していたが薄給で多忙の彼は自然と歸宅、出勤も不規則となり、豐子は彼を疎んじて
「折角夜安心と思つて安く下宿させたのにあれじやあ何の留守番にもなりやしない。」とさえ近所にふれ歩いた程であつた。
「お茶でもいれようか武田さん。」
「いや、僕は今日暴風雨の警戒勤務で、晩方から出掛けねばなりませんから晝寢をしますので。」
彼は二階に上ると自分の部屋に入り、ゴロツと寢轉がると革のピストルのサツクを枕に敷いて野球雜誌を讀み始めた。こうして置けば萬一、晝寢の隙に盗まれる心配はない。
豐子は近所に早速生々しい恐怖の體驗報告を吹聽しようと支度を始めていた。
「御免なさいよ。」
氣がつくともう座敷にぺつたりと下隣りの老婆が坐つていた。
「おや瀨木さんかい。」
「はいよ。」
瀨木一家は滿洲からの引揚者で、燒跡にタイル張りの元の家の風呂場を台所に燒トタン張りのバラツクを建て、四疊半一間に親子六人が生活していた。彼等は靈友會という新興宗教の狂的な信者でその會の幹部をつとめているのが瀨木信平であつた。朝は五時に起き、文字通り讀經に起き讀經に寢る明け暮れで、バラツクに不相應な佛具を運び入れ御題目を稱えては祖先の靈に感謝するのが日課であつた。戰爭の打擊でピントの狂うた人達でも云うのかも知れない。そして、彼等の樣な人々が何の矛盾なく通用する時代であつた。
「何か用かい。」
「今、物賣がさん〳〵粘つたつていうじやないかね。」
不思議にも既に何處からか小耳に狹んでの御來着であつた。

「そうなんだよ。」
と彼女が一部始終を語ろうとするより早く、それを抑えて、
「そういう目に逢うのは、御先祖に過つた事をした人がいたからですよ。すべからく、御先祖を崇めればそういう災いに逢はなくともすむんだよ。」
他處から聞けば正に噴飯物な論說であつた。しかし彼女にとつて一蹴するべく餘りに强烈な恐怖であつたのだ。
「じやどうすれば良いんだね。」
「靈友會に入りなさい。御題目を一心に稱えれば御先祖樣に自然と通じるのですよ。」
豐子はそこでやゝ、このしなびた老婆を輕べつした。當然の歸着でと彼女は思つた。瀨木老夫婦は、事有る毎に、例えば風邪を引いたり怪我をした、恐い目にあつた等という話を耳にするや、どんな遠方にでも知己のない家へでも上り込んで「御先祖樣への敬いが足りない」といつて靈友會への加入をしつこくすゝめるのだつた。人々は現實の不幸という弱點に靈友會という團體の何物かも知らずに入り、宗旨を、先祖代々の宗旨を變えて、月に十圓宛を支拂つて先祖を敬つていた。つまりそれが始つたと彼女は思つたのである。それから三十分許り、有難い法話、靈驗をたつぷり聞かされて（それは佛樣に上げた御水で御飯を炊くと米がよく殖えるとかいつた類の話であつた）。豐子は馬鹿らしくなり、よく動く老婆の口を眺めている內に眠くなつた。欠伸が出そうになつた。しかし、この狂信者の前で大口をあけば「そういう態度でいるから駄目だ」と怒られそうだつたし、そんな場合に「そんな七面倒くさい事嫌いだよ歸つておくれ」と獅子吼する事もた易かつたが、今日の老婆には生氣があり、豐子には鬪志が湧かなかつた。老婆はさん〳〵說敎した擧句漂然と歸つてしまつた。そうなると何か壓し盡された憤慢がポン煎餅の機械の樣に吹き上げて、家中に轟いたのである。
「武田さん、廊下、雜巾掛けしておくれ。」
大きい聲であつた。武田は慌てゝ飛起きると階段の降り口迄出て行き「おうい」と返事して置いてから部屋へととつて返し、枕のピストルを押入に投り込みぴたりと襖を閉めて苦笑しつゝバンドを締め直した。
宵の口からそろ〳〵もちの梢がゆれ始め、やがて嶮惡な空模樣となつた西の空に向つて雀が吹き飛ばされそうに飛んで行つた。暴風雨圈內に東京は入りつゝあつた。下宿の學生達は夏休みで故里に歸省中でこの滅法廣い二階家に彼

女は獨り家を守つていた。

やがて九時となり十時となると嵐は絶頂となり相當の風速の風が雨を伴つて高台の家に襲い掛つて來た。電氣ははかなくも二三度明滅を殘して停電してしまつたのでラヂオの颱風所在報知は聞くべくもなく、彼女は蒲團の上でつんぼと盲目の不安を犇々と感じていた。風はどつと押寄せ、雨戸は今にもはずれにうに内測へ押寄せられ、次の瞬間、吸寄せられて今度は外側へがたんと途方もない大音をたてた。眞暗闇の中で恐怖はつのるばかりであつた。思はず立上つてしまう樣なシューという梢と風の擦過音と雨滴の雨戸を叩く音が四界を壓しともすれば人間は已れ一人しか息吹いていないのではないかと錯覺する瞬間が連續するのだつた。もう之以上我慢は出來なかつた。豐子は便所に入つて暗闇に足下を操り乍ら、北側の風當りの少い小窓を少し開けて裏手を見た。そこは又、嵐と人間の壯絶な死闘であつた。閃めく電光の中に必死にトタン屋根に石を乘せ飛ばずまいとする瀬木の息子、或いは釘を打ち、或ひは屋根に腹這いになつてまくれ上るトタンを押えるもの、そして風に絶え〳〵にしかし力强く響いて來るものがあつた。それは、御題目だつた。

「妙法蓮華經、南無妙――。」

座敷に歸つて蒲團の上にちよこんと坐つて見たがどうしても落代かない。その時一層甚い風がどうと屋台を搖つた。屋根瓦の碎け飛ぶ音とへちま棚のみぢんに崩壞する音がした。

「本當に御先祖樣の罰かも知れない」豐子は思つた。午後ふと團扇をかざして見たへちま棚を思い浮べた。「どうともなるさ、佛もへちまもあるものか」と蒲團にごろりと横になつた。しかし、彼女は風と雨ときしみ金槌と、どうかすると幽かに聞えて來る題目の事を聞いている内に「あゝ明日はあの靈友會に這入ろう」と決心するのだつた。

（五〇、七、廿六）（文藝部々員）

編集後記

僕達高校生にとつて最も大切なものは思索である。僕達は考へる葦でなければならないのだ。思索する心を失つた者は學生の名に價ひしない。例へどのやうにそれが未熟なものであらうとも僕達は僕達自身の考へを持たなければならないのだ。そのためには僕達は絶えず偉大な先人の聲を聞き、自らの思索を續けて行かなければならない。だが昔の學生に比べて僕達は何と騷々しいことだらう。あの三太郎のやうに忠實に自己を見つめ、堅實に思索した學生はもうゐないのだらうか。戰後の僕達はやゝもすれば逸樂のみを求め、學問探求といふ最も大切な仕事を忘れがちではあるまいか。僕等にとつて必要なのはただ形式だけの學制改革ではない。新しい教育制度がかりに理論の上ではいくら立派に見えても、僕達が貪慾に勉强せず、むさぼるやうに讀書せず、堅實に思索しないで靴や頭ばかりを光らせる社交人になりきつてゐたのでは何にもならない。知識人として生きなければならぬ僕達の仕事は、常に思索すること、これ以外のものではない。

こゝに僕達の、未熟ではあるが眞劍になつて創り出したいくつかの作品を一冊の雜誌にまとめて出すことになつた。この種の企畫が、色んな意味に於て困難なとき、こうして僕達自身の雜誌を持つことは全く幸福なことゝいはねばならない。最初の試みであるため大部分は文連の會員の書いたものになつた。だが今後は更に廣く全校からの原稿も募り、この雜誌が、本校の知性の理現となるやうに育てゝ行くべきであらう。終りに、僕達の無理なお願ひを御快諾になり御多忙中、玉稿をお寄せ下さつた諸先生方の御厚意に對して心から感謝の意を表したいと思ふ。

編集委員
天野弘一
安東伸介
印東二郎
國枝夏夫

以前　一九五〇年號

一九五〇年　十月卅日印刷
一九五〇年十一月一日發行

編集兼発行者　天野弘一
印刷者　中村由親
印刷所　株式會社　電新堂
東京都中央區木挽町三ノ七

發行所　慶應義塾高等學校
文化團體連盟
横濱市港北區日吉町

時は來たらん、萬人が眞理を知り、劍は變りて鋤となり、
槍は變りて鎌となり、獅子は小羊の傍に臥してあそぶ、
——その時は來たらん。

——ロマン・ロラン——